ポスト・ローマ期ヨーロッパの表象構造
–コミュニケーション行為の歴史的考察(1)–

1. 序論　考察の目的と範囲

人類が文明社会を創りだすうえで、他者と意志疎通を図り、相互に了解しあい、場合によって協力して行動するための手段を獲得することは、最も重要な基本的条件であった。そうした文化的基盤なしには、人間は他の生物がなしえなかった精緻で高度な文明を創造できなかったであろう。むろん人間以外の生物の多くも、それぞれ固有のコミュニケーション様式を発達させた。たとえば鳥の囀りや、蜜蜂のダンス、マウテンゴリラが胸を両手で打ち鳴らすタンブリングなどは、自分の意志を同じ種の仲間に伝えるためのコミュニケーション行為であり、その意味では根本において人間という種と変わらない能力を具えている。だが、分節化された音声と文字という手段を体系化し、精緻に発展させ、これを元に巨大で多様な内実をもつコミュニケーション共同体を築きあげることができたのは、人類だけであった。

そもそもなぜ人間が精密で高い水準のコミュニケーション様式を造りだすことができたのであろうか。文明社会を生みだすためであったという答えは、あまりに目的論的に過ぎる。アリストテレスが云うように、本来人間は社会的＝ポリス的動物であるからと云うなら、その証拠を遺伝子の中に見つけられなければならない。遺伝子研究がそこまで発達するには、まだ時間がかかりそうだ。ヴィレム・フルッサーは『テクノコードの誕生–コミュニケーション学序説–』と題する著書で、「人間が他の人間とコミュニケートし＜ポリス的動物＞だとされるのは、人間が社会的な動物であるからでなく、孤独で生きることのできない孤独な動物であるからだ」[1]と述べている。「孤独」という存在条件を受け入れ、そのように生きることができない「弱さ」が、コミュニケーション様式の発達を促し、ひいては文明の構築にいたるという逆説的理路をフルッサーは主張するのである。それは実存的コミュニケーション論とでも名付けられるような見方である。

人類の諸文明の成立が、コミュニケーション行為の結果なのか、それとも高

---

[1] ヴィレム・フルッサー著、村上淳一訳『テクノコードの誕生–コミュニケーション学序説–』、東京大学出版会、1997 年、４頁。

度な文明を造りだすために、人間はコミュニケーション手段を編みだしたのか、つまり文明が原因なのか、簡単に答えが出る問題ではない。われわれが取り組もうとしている課題にとっても、緊急の答えを出さなければ先に進めない論点ではない。ここでは、コミュニケーション問題が人間の意志疎通の諸様式と深く関連しあっていることを確認することで、論を先に進めよう。

人類のあらゆる時間段階で、また様々の空間で、コミュニケーション関係が織りなされ、その結果としてそれぞれの社会が構築され、政治が展開し、学芸、芸術が生みだされ、信仰が人々の間に浸透する。人類という極度に類化された抽象的な言葉で表現しているために、そのようにして築かれた世界の多様性という側面が、なかなか認識の地平に姿を現さないが、われわれは経験的にそれが非常に多様性に富んでいることを知っている。多様性とは視点を変えて云うならば、相互の差異であり、コミュニケーションの内容が現実に文明圏により大きく異なっていることは、これまた一般の通念である。むろん様々のレベルで共通部分を取りだすことができるのは確かであるが、コミュニケーション様式が文明圏ごとに少なからぬ差異を示すことは、そもそもそうした差異を基準にして文明の切り分けを行っているのであってみれば、当然至極とも云えるのではあるが。コミュニケーション形式がもつ文明ごとの差異の内実として、すぐに念頭に浮かぶのが言語である。言語を文字化した文学作品や歴史記述なども、それに数えられる。この他に絵画、彫刻などの芸術作品、社会内部の、あるいは社会外部の集団との合意形成のために行われる儀礼的所作や、土地や人に付される名前なども挙げることができる。いずれも人間が実践する、あるいは意図する他者との意志疎通のための行為である。これを表象実践という表現でいいあらわしてもよいであろう。

異なる文明圏ごとに表象の差異があるとした上で、それでは同じ文明圏では、表象構造は時代を通じて変化することはないのであろうか。もっと具体的に云うならば、ヨーロッパの歴史時代を通じて、表象構造は不変であったのだろうか、ということである。誤解のないように説明しておかなければならないが、ここでわれわれが表象構造の同一性と云うとき、それは個別の文学作品や芸術様式が歴史時代におけるそれらの出現から、近代に至るまでその形式を変えなかった、と云いたいわけではない。そんなことはなかった。文学のジャンルは時代とともに様々な変遷をとげ、全体として著しく多様化したし、絵画芸術も、例を挙げるなら古典主義的様式からフォビズムまで、驚くほどの変化を示して

いる。それは云うをまたない殆ど自明の事柄に属している。問題にしたいのは、つまり考察の対象にしたいのは、個々のコミュニケーション体の変動ではなく、それらが相互に取り結ぶ関係の様式、われわれの言葉で云うならば「構造」がはたして時代により、固有の様相を示すのか否かということである。もし、表象構造が変化を見せるとするならば、それは何を契機として、いかなる論理によって、そしてどのような条件のもとで変動するかを探究することが論点となる。

われわれの構想では、対象をヨーロッパ中世全期間に広げる積もりであるが、当面は西暦千年以前の、ポスト・ローマ期・中世初期に考察対象を絞らざるをえない。これは専らわれわれの準備の不足による。西暦千年以後のヨーロッパにおける表象構造を解明することにより、それ以前の時代の構造と異なっているか否かが、より鮮明に理解可能となり、その変化に関わる細部のメカニズムも明らかになる筈であるが、この比較による問題の掘り下げの回路は棚上げにしておかなければならない。

したがって、考察の時代枠は西暦 5 世紀から 10 世紀までである。

「ヨーロッパ」という概念がカトリック・キリスト教世界のほぼ同義語として使用されるようになったのは、8 世紀後半のカロリング時代においてであった。「カロリング・ルネサンス」と呼ばれる古典文化の復興を実現した宮廷の知的サークルを構成した聖俗の貴顕の人士たちは、その会話や著作のなかで自分たちが生きる世界を「エウローパ」と呼び慣わした。シャルルマーニュに冠された「Europae Pater」という尊称、すなわち「ヨーロッパの父」という呼び名は、かれらのそうした認識を雄弁に物語る事実である。云うまでもなくビザンティン皇帝が君臨するとギリシア正教の地域はこれには含まれない。したがって、「ヨーロッパ」の元来の意味は、今日の地理空間に置き換えるならば、専ら「西ヨーロッパ」と称されている地域を指す呼び名であった。そこでわれわれの考察の空間的広がりもまた、これに倣って現在の西ヨーロッパを主たる対象にすることにしよう。現在東ヨーロッパと称される地域は、基本的に考察から外される。また近年中部ヨーロッパと称されることが多い空間も、濃密な議論の対象になることはない。空間的枠組をこのように歴史的な生成の過去に即して設定することにより、議論の均質性と一貫性が保証されるのであろう。

2.　錯綜する言語

2.0. ローマ期,　ポスト・ローマ期の言語環境

2.1「バベルの塔」

人間の意思疎通の最も一般的で、直接的形式が、言語によるコミュニケーションであることは論を俟たない。だが言語使用の環境は、同一の言語が話される領域の広がりの大小や、言語を共有している領域内部でのその使用形式の複雑さなど、細かく見るならば、決して単純な理解をゆるさない多様性を帯びている。

数多くの言語の輻輳状況は、キリスト教の聖典、というよりは厳密には元来ユダヤ教の聖典であった『旧約聖書』において、神話的、寓意的にその起源が説かれている。それは有名な「バベルの塔」についての件である。旧約聖書翻訳委員会の手になる最新の研究成果に基づく新訳で紹介しよう[1]。ノアの箱舟で知られる大洪水のあと、人類の物語はノアとその子孫の物語として展開する。「創世記」一一章は次のように述べている。

「全地が一つの言語、同じ言葉であった時のこと、彼らは東から移動して、シンアル（南メソポタミア）の地に平地を見つけ、そこに住み着いた。彼らは互いに言った、「さあ、われらは煉瓦を作り、焼き上げよう」。彼らは石に代わり煉瓦を、漆喰に代わりアスファルトを得た。また言った、「さあ、全地の面に散ることがないように、われら自ら都市と頂が天に届く塔を建て、われら自ら名を為そう」。

ヤハウェは降りて行き、人の子らが建てた都市と塔とを見た。ヤハウェは言った、「みよ、彼らは皆一つの民、一つの言語である。そして、彼らの為し始めたことがこれなのだ。いまや、彼らがなそうと企てることで彼らに及ばないことは何もないであろう。さあ、われらは降りて行き、そこで、彼らの言語を混乱させてしまおう。そうすれば、彼らは互いの言語が聞き取れなくなるだろう」。

こうして、ヤハウェは彼らをそこから全地の面に散らした。彼らはその都市を建てることを止めた。それゆえ、その名をバベルと呼ぶ。ヤハウェがそこで

---

[1] 旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 1 –律法・創世記, 出エジプト記, レビ記, 民数記,申命記』岩波書店, 2004 年.

全地の言語を混乱させたからである。
ヤハウェは、そこから彼らを全地の面に散らした」[2]。

天に摩する巨大な塔を築いた人間の不遜な行為に、神ヤハウェは怒り、彼らが語らって、神をも畏れぬ所業が容易に行われ得ないようにするために、意思疎通の障害をもうけた。それが人類の癒しがたい宿痾とも言うべき、意思伝達手段たる言語の多様性であった。現在様々な情報機器の発達や、技術の革新によって、言語の差異を克服する手段としての、自動翻訳装置の実用化が夢物語ではない時代を迎えているが、全人類が単一の言語によって意思疎通をはかることができる、というのは人類の永年の願望であった。そうした希求の由来を、「バベルの塔」の逸話に即して考えてみるならば、キリストがあたかも人類の罪科を背負って十字架に掛けられたように、言語的多様性は人類の神を畏れぬ傲慢さがもたらした罰であり、課された永遠の障害という寓意的解釈が成り立つのかも知れない。現代のテクノロジーの未曾有の新しさは、そうした人間が永年置かれてきた根源的状況から脱することを可能にしている、というところにある。

2.1.1　帝国の情報伝達

話をローマ帝国末期ヨーロッパ地域の言語状況に引き戻そう。ローマ帝国の版図は広大であった。西の端に位置するブリテン島のハドリアーヌス帝の長城から、東端のペルシア帝国と対峙するテグリス川、ユーフラテス川が流れるメソポタミアまで、東西の差し渡しは約 4000 キロに達した。ライン川の河口地帯から、北アフリカのアトラス山脈の駐屯都市まで、南北の国境間の距離でさえ 2000 キロを数える、巨大な支配領域がローマ帝国であった[3]。

こうした広大な帝国を支配する上で、重要なのは人間の体に例えるならば、必要な情報や命令を伝達することによって身体を適切に統御する、神経組織である。帝国統治に欠かせないのは、優れた、そして迅速な情報伝達の組織である。緊急の場合は辺境地帯に 10 キロからから 20 キロ間隔で配置された監視砦がリレーする狼煙による信号方法があった。だがこれはあくまで緊急用であり、複雑な内容の連絡は難しい。込入った内容の連絡は、やはり事情に通じて、判

---

[2] 前掲書 23~24 頁。

[3] P. Heather, *The Fall of Roman Empire. A New History,* Macmillan, London, 2005, p.13.

断力を具えた文官を派遣しての指示が確かで、信頼できる遣り方であった。

イギリスのマンチェスター大学には、パピルス文書のコレクションで有名なジョン・リーランズ図書館がある。ローマ支配下の下エジプトと上エジプトの境に位置する、ナイル川西岸のヘルモポリスで出土したパピルス文書を、ヴィクトリア朝イギリスの代表的なコレクター、A・S・ハント（Hunt）が購入し、1896 年にマンチェスター大学に寄贈してできたコレクションである。その中に西暦 310 年代の書簡が含まれている。これは一部が欠けた断片であるが、その欠けた部分は、幸いフランスを代表するパピルス収蔵機関であるストラスブール大学のパピルス研究所のコレクションに収まっていることが確認され、双方を突き合わせれば、ほぼ完璧な 4 世紀の一組の書簡が復元される。

ところで、肝心の書簡の内容であるが、書き手はヘルポポリスの土地所有者で、同時に帝国のかなり高いランクに属する官僚でもあったテオファネスという名前の人物が、公務でトルコ南部のシリア国境に近い、東部属州の首都的存在であった大都市アンターキヤ（アンティオキア）に旅をしたことが記されている。旅行の詳細については記録していないが、梱包した荷物の内容や会計記録、旅行の日程など充分興味深い情報が書き込まれている。

公務という任務の性格から、テオファネスはナイル河畔の土地からアンターキヤまでの旅行に際して、帝国の駅逓制度（cursus publicus）を利用する特権を享受できた。主要な街道沿いに一定距離ごとに国家の宿駅が設置されていて、公務で往来する使節や役人は、そこで騎乗用の馬や牽引用の牛を調達したり、宿舎として一夜を明かしたりすることが許されていた。

彼は上エジプトにあったニキウ（Nikiu）の町を 4 月 6 日に出発した。そして３週間半後の 5 月 2 日にアンターキヤに到着している。一日平均して 40 キロを踏破した計算になる。合わせて 1000 キロ、往復 2000 キロの旅である。だが、これは平均値であって、道路事情によって進み具合には当然違いがあった。旅行の初めはシナイ砂漠を横断するために、一日の平均旅程は 24 キロ程度であった。だが一度「肥沃な三日月地帯」に入ると一日の旅程は 65 キロにスピードアップし、目的地のアンターキヤに入る前日などは 100 キロ以上の道のりを踏破している。エジプトへの帰途の旅程も、これとほとんど変わらない。おそらく緊急の早駆けの馬による連絡のばあい、走行距離は一日 250 キロであったと推定されているが、そうでない時は、テオファネスのような旅が標準であったと思われる。約一日 40 キロの旅で、これは牛が牽く牛車の平均速度である。

この速度は多分軍隊の移動の場合も同様であった。大量の装備や武器の搬送には牛車による運搬が欠かせなかったからである。少し余談になるが、テオファネスの旅の具体的な姿が、荷駄の記録から明らかになる。例えば気温の変化、寒暖に応じて適宜着替えができるように、薄手、厚手の衣服。公式の会見用の役人の制服、入浴用のバスローブなどである。寝具としてのシーツや、マットレス、調理用器具なども携えた。言うまでもなくテオファネスは単独で旅行をしたのではなく、一段の使用人、おそらくは奴隷を伴っていた。かれらが旅行中、テオファネスの世話をした。テオファネスは帰途、シナイ砂漠にさしかかる前に、160 リットルの葡萄酒を購入している。かれはまた別のところで、雪を買っている。これは夕食の折に飲む葡萄酒を冷やすためであった。

テオファネスの荷物リストや会計記録からは、このように複雑で、仕える者にとっては気骨の折れる、高級官僚の旅の生き生きした姿が浮かんでくる[4]。

帝国の広大な領域を統治し続ける行為は、テオファネスらの興味深い旅行の復元にもかかわらず、信じがたいほどの努力の賜物であったことは疑いようもない。当時の技術手段によって治めることは、現在の通信技術に引き比べてみるならば、ロ―マ人は現在のヨーロッパ連合を合わせた 5 倍から 10 倍の広がりをもつ国土を支配するのに匹敵したからである[5]。

2.1.2　ブリテン島嶼地域の言語

この巨大な広がりを有する政治空間には、様々な民族集団が割拠し、固有の文化と習慣、そして言語をもって生活していた。まず、最初にローマ帝国の領土において使用されていた言語について、大まかに概観してみよう。

西のブリテン諸島は、ケルト語の中心地帯であった。8 世紀まで、互いに異なり、相互に理解できない二つのケルト語が共存していた。一つはブリトン語の系統語である。もう一つがゴイデル語の系統である。

ブリトン語の系統はさらにコーンウォール語、大陸のブルターニュ語、ウェールズ語の三つに細区分される。これらのケルト語グループは、言語学でPケルト語群と呼ばれている。その理由は[qu]の音が、この言語系統ではpの音として現われるからである[equ(u)s→epos][6]。これに対して、アイルランド語、スコテ

---

[4] *Ibid*. pp. 104-106.

[5] *Ibid*. p. 107.

[6] C・レンフルー、橋本槇矩訳『ことばの考古学』、青土社、1993 年、二九九頁。

ィシュ・ゲール語、マンクス語からなるゴイデル語群は、Qケルト語群と称される。[qu]の音がq、あるいはk(ch)と発音されるからである[7]。現代の言語学では、二つの語群の親縁関係は明らかだが、中世にはそうした認識がなかった。二つは全く異なる言語と観念されていた[8]。

西暦 500 年頃、ゴイデル語は、ローマの支配がついぞ及ばなかったアイルランドや、アイルランド海に浮かぶ島々で話された。コーンウォールやウェールズの西海岸沿岸で、５、６世紀に一時期広まったが、長続きはしなかったし、現在の西スコットランドには展開していない[9]。

一方、Pケルト語群に属するブリトン語は、ローマ支配に呑み込まれた地域で話されていたが、この間ラテン語と併用されて生き続けた。そして中世初期にはウェールズ語、コーンウォール語、カンブリア語、ピクト語など、それぞれの地域言語に分化していった[10]。

ブリトン語の使用者はさらに、５世紀と６世紀に大陸の大西洋岸一帯に移住したらしく、ことにスペイン北西端やフランスのブルターニュ半島に持続的に移動したと考えられている。

この移住の原因については諸説あって、議論は続いている。西暦 540 年頃、ブリトン人の修道士ギルダス Gildas は『脱出について De Exidio』と題する著作を著した。これはブリトン人のアルモリカ半島、すなわち後のブルターニュ半島への移住の様子を述べた記録である。それによれば、アングロ・サクソン人のブリテン島への侵入と移住の危険に曝された。ブリテン島東部の人々は、絶望的な思いで海の彼方にある土地を求めて船出したのだった。「船が岸を離れると空気は悲嘆に満ち、船乗りの威勢のよい歌の代わりに、賛美歌「汝は我らを草を食む羊の如く、異教徒の中に解き放った」と悲しみの歌をうたった。

６世紀のビザンツの歴史家プロコピオスは、この世紀の中頃にもブリテン島からガリアに渡る移住の波はまだ続いていると記している。その理由は母国の人口過剰が原因であると指摘している[11]。

ブルターニュ半島に定住したブリトン人の言語は、詳細な研究から、アング

---

[7] 上掲書。299 頁参照。

[8] Julia Smith, *Europe after Rome. A New Cultural History 500-1000*.,p.17.

[9] *Ibid*. p.17.

[10] *Ibid*. p.18.

[11] Burry Cunliffe, *Facing the Ocean. The Atlantic and its Peoples, 8000BC-AD1500,* Oxford, 2001, pp. 461-462.

ロ・サクソン人の脅威にさらされた東ブリテン島の人々のそれではないことが判明している。言語学的に見ると、到来したブリトン人は東ブリテン島ではなく、南西ブリテンや南ウェールズからやって来た人々であった。かれらは東から侵入したアングロ・サクソン人よりも、むしろ西のアイルランドから膨張を続けた Q ケルト語、すなわちゴイデル語を使用する人々の圧力のもとに、移住を余儀なくされた可能性が大きいのである。P ケルト語は中世初期を通じて、その使用領域が常に縮小傾向を辿った。その際主要な勢力となったのがダルリアダ Dalriada と名乗ったアイルランドの一部族である。

ダルリアダは北東アイルランドを支配し、さらに西スコットランドにも進出した。かれらがゴイデル語をスコットランドに持ち込んだのである。そして南東インバネス地方 (Lorn, Kintyre, Cowal) に勢力を張った[12]。ここを起点に徐々に勢力を東進させ、ソルウェイ湾とフォース湾を繋ぐ線の北はやがてすべてゴイデル語の世界となった。西暦 1100 年頃には、アルバAlbaという名前で住民が呼ばれた中世スコットランド王国の領域と重なる展開を遂げた。ここではゴイデル語が、ブリトン語系の在地の言語であったカンブリア語やピクト語を駆逐した。その具体的様相は詳らかではないが、６世紀のアイルランド修道士コルンバが、スコットランドの北部と東部に住むピクト人にキリスト教を宣教した折、専ら「通訳」の助けをかりて説教を伝える外はなかったが、１０世紀には、中部スコットランドでこの地のエリートたちがゴイデル語と、まだ残存していたブリトン語系統のピクト語の両方を使用するバイリンガルであったことが知られている。その後は、アルバ王国の支配言語はゴイデル語であった[13]。

2.1.3　ブリトン語とブルターニュ半島

ローマ帝国軍がブリテン島から全面撤退した後に起こった、Qケルト語を使用するアイルランド系の人々の武力あるいは平和的な膨張を前に、Pケルト語であるブリトン語を使用した民の一部は、修道士ギルダスが書き残したように、英仏海峡を挟んで対岸にあるアルモリカ半島に移住した。だが実はブリテン島とアルモリカ半島との関係は、ローマ支配の間、密接であり続けていたのである。先ほど述べたブリテン島のローマ正規軍は、アルモリカ半島で最終的に消滅し

---

[12] Donnchadh Ó Corráin, “Ireland,Scotland and Wales, c.700 to the Early Eleventh Century”, *The New Cambridge Medieval History,* t. II, Cambridge, p.58.

[13] J. Smith, op. cit. pp. 20-21.

た可能性が指摘されている[14]。B・カンリフによれば、ウェールズに伝わる幾つかの伝承は、383 年にブリテン島から出た簒奪皇帝マクシムスに連れてこられた残党が、５年後に敗北し、かれらの指導者であったコナン・メリアデックConan Meriadecの統率のもとにアルモリカに定着したという。コナンはこの地にブルトン王の王朝を築こうとした[15]。

このエピソードを実証する記録は存在しない。だがブリテン島の敗残部隊が帰国の途中でこの半島に居着いてしまったというのは、ありそうな事実であるし、そうでなくてもブリテン島から派遣された「同盟軍foederati」として、４世紀末か５世紀初めの混乱した政治・社会状況のもとで、ここに定着してしまったという事態はありうるのである。４世紀を通じて南ブリテン島とアルモリカ半島の間の商業取引は活発であり、両地域の人々が小規模に往来することは充分にありえた[16]。先に「６世紀のビザンツの歴史家プロコピウスは、この世紀の中頃にもブリテン島からガリアに渡る移住の波はまだ続いていると記している」と述べたが、アルモリカ半島のことを「ブリタンニアBritannia」と最初に呼んだのはこのプロコピウスであった。しかし、アルモリカ半島に住む人々を「ブリタンニBritanni」と称する呼び名は、すでに 480 年にシドニウス・アポリナーリスが自分の書簡の中で使っている。だから「ブリタンニ」の住む土地という意味での「ブリタンニア」という名称は、かなり早くに成立していたに違いないのである。

ブリテン島から到来した人々が住む「ブルターニュ」は、現在の都市レンヌの東を流れるヴィレーヌ川が境であった。ここを越えるとブルトン人（ブルターニュの人々をこう呼ぼう）の支配する世界に足を踏み入れたことになる。ブルトン人の定住領域は当初「ドゥムノニアDumnonia」と称された。これはブルトン人が到来した元の土地である、ブリテン島南西部にあった王国の名称であった。５世紀中葉から７世紀にかけて、ブリテン島には１３の王国が存在していて、その一つがドゥムノニアであった[17]。これは世襲的に王位継承が行われた単一の王国で、王国の名称がローマ統治時代のDumnoniiに由来する事実からも明らかなように、ローマの地方統治機構を継承して成立した王国なのである。

---

[14] B. Cunliffe, op. cit., p. 461.

[15] *Ibid.*

[16] *Ibid.*

[17] K. S. Dark, *Civitas to Kingdom*, Leicester, 1994.

したがってローマ的伝統に色濃く染め上げられた統治体制であり、世俗の土地所有関係も教会領の所有関係も、ポスト・ローマ期に深刻な変動を経験しなかったようである[18]。９世紀に書き記されたあるテクストには、６世紀初頭のドゥムノニアの王コノモルス（Cynfawr）が、英仏海峡を挟んで二つのドゥムノニア、すなわちブリテン島のそれとブルターニュを両方支配したと述べている。言語面から見るならば、ブリテン島のドゥムノニア–これは実質的にコーンウォール地方–とブルターニュ半島とが、中世初期を通じて密接な関係にあったことが知られる。それというのも、１０もしくは１１世紀まで二つの地域の言語（Pケルト語＝ブリトン語）は区別できないほど似通っていたからである。言語変化という点でも、六世紀に始まるその変化は、コーンウォール地方でも、ブルターニュ半島でも並行して起こっている。これら二つの地域の間に絶えざる密接な交渉がなかったならば、こうした現象は起こりえないのである[19]。

ブルターニュ半島には、コーンウォール地方と同じ地名や地域名が数多く見られ、あたかも鏡像のような観を呈する。一例がブルターニュ半島の西部の地域名コルヌアイユ（Cornouaille）である。これは言うまでもなく Cornwall のブルターニュ版である。ある空間の地名群を一つのテクストに見立てるならば、二つのドゥムノニアは、酷似した二テクストと見なせる。海峡を渡って大陸の半島に定着した南西ブリテンの出身者たちは、郷愁の想いを込めて、山や川、海岸、集落に、故郷の土地にゆかりの名前を与えたのであろう。

2.1.4　ガリア語の消滅

大陸ケルト語は単一の言語ではなく、複数の地域的多様性をもった言語集団を内実としている。ヒスパノ・ケルト語と称されるあまりよく分からない、イベリア半島中央北部で話されていた言語系統と、ガリア語と呼ばれる系統が現在区別されている。後者の系統に属する大陸ケルト語は、東は小アジアから中央ヨーロッパを経て南下し、北イタリア、英仏海峡にまで及んでいる。普通レポンティック語と呼ばれる、北イタリアの湖水地帯のガリア語や、ガラティア語と称される小アジアのガリア語を、学者によっては別系統に分類することもあるが、こうした見方は近年では支持されていない[20]。現在の通説は、ヒスパノ・

---

[18] Wendy Davies, The Celtic Kingdoms, *The New Cambridge Medieval History,* vol.1, Cambridge, 2005, p. 256.

[19] *Ibid.*

[20] Joseph F. Eska, Continental Celtic, *The Cambridge Encyclopedia of the World's Ancient Languages*,

ケルト語が、紀元前 1000 年紀に最初に中央ヨーロッパのどこかで原ケルト語から分離し、独自の発展を遂げたと考えている。その他は、ガリア語を含めてヨーロッパから小アジアに跨がる広大な空間に分散した原ケルト語から、直接に発展した[21]。

そうした言語に関する直接の資料は碑文である。最古の資料はレポンティック語の碑文で、紀元前 600 年から紀元前後までに年代比定される。アルプス南嶺には、レポンティックとさほど変わらないケルト語碑文が８点見つかっている。これらは紀元前２世紀ころの記録と考えられている。アルプス北面の最古のガリア語碑文は前３世紀のもので、ギリシア文字で記録されているが、その後ローマ人による征服が進むと、ラテン文字で記録されるようになる[22]。これは言語を記録する固有の文字をもたない場合、音声を記録する文字媒体がいかに政治的文脈によって変動するかを物語る事実である。ガリア語は西暦２世紀頃には話されなくなったというのが、言語学者たちの見解であるが、それは一律には確定できない。言語の盛衰は政治状況に大きく左右されるが、同時に習慣の問題でもあり、その消長はミクロな多様性を常に内在させているからである。

そこで以下、様々な歴史の記録からガリアにおけるガリア語使用の残存状況を考察しよう。

４世紀中頃から５世紀初めにかけて生きた聖ヒエロニュムスは、教父としての著作活動を専らイエルサレムでおこなっていたが、そのかれは小アジアのガラティア語が、ライン川のローマ都市トリーアの人々が話す言語と極めて似ていると証言している。すでに述べたようにガラティア語はガリア語であり、この聖ヒエロニュムスの述べるところによれば、ガリア語はライン地帯では５世紀初めにも生き続けていたということになる。

だが、実はさらにもっと後の時代にもlingua gallicaが話し言葉として、命脈を保っていた証拠がある。先に名前を挙げたオーヴェルニュ地方のセナトール貴族シドニウス・アポリナーリス（430-489）は、エクディキウスという名前の人物に宛てたある書簡の中で、オーヴェルニュ地方の貴族が粗野なケルト語の言い回しを棄てたことを次のように表現している。「汝の個人的活動のお蔭で、貴族たちが粗野なケルト語sermonis celticiを棄てて、あるいは格調ある雄弁な

---

edited by Roger D.Woodard, 2004, p. 857.

[21] *Ibid.*

[22] *Ibid.*

言い回し、あるいは詩の韻律を身につけるにいたったことを、恩義に感じたのである…」[23]。

６世紀後半に活躍した詩人のや、トゥール司教グレゴリウスらの作品にもガリア語の痕跡が見える。たとえガリア語がこの時代に日常的な会話で用いられることがなかったとしても、それは人々の記憶から消し去られた言語であったと到底考えることができないほどの重みをもって、時折言語生活の表面に躍り出たのであった。おそらく、当時のガリアの人々はラテン語で話しながら、同時にケルト語での思考も並行して行うような人々の存在が少なくなかったのであろう。

たとえばウェナンティウス・フォルトゥナトゥスは「あらためてヴェルネメトの聖ヴィンケンティウスの聖堂について」と題する詩の中で、Nomine Vernementis uoluit uocitare uetustas, quod quasi fanum ingens gallica lingua refert.「古人はそれをVernemetという名前で呼ぼうと望んだ。ヴェルネメトとはガリア語で大いなる聖域という意味である」[24]と、ガリア語による一種の語彙注解を行っている。よく知られているように、フォルトゥナトゥスは、北イタリアのヴェネツィアに近いトレヴィゾの生まれ育ったイタリア人である。ガリア語はおそらくかれがガリアにやって来た 565 年以後、ガリアの地で知ったと推定される。つまり 6 世紀後半にも、ガリア語は会話言語ではないにしても、語彙の形で頻繁に援用されたに違いないのである。

トゥール司教グレゴリウス（†594 年）は、その有名な著作『歴史十書』の中で、ガリア語について言及している。この著作の第 1 書３２章はゲルマン部族の一つアレマンネン族がかれらの王クロクスニ率いられてガリアに侵入した様子を述べて、次のように語る。Veniens vero Arvernus, delubrum illud, quod Gallica lingua Vasso Galate vocant, incendit, diruit atque subvertit[25].「かれはオーヴェルニュに到来し、火を放ち、破壊し、ガリア語でVasso-Galateと呼ばれていた神殿を倒壊させた」。ついでにグレゴリウスの記述をさらに続けよう。「この神殿は壮麗なたたずまいで建設され、再建されていた。その囲壁は二重で、内部は薄壁だったが、外壁は切り石を積み上げて出来ていた。その壁は厚さが３０ピエ（９m）あった。内部は大理石とモザイクで飾られていた。舗床は

---

[23] Léon Fleuriot, *Les origins de la Brtagne. L'émigration*, Paris, 1982, pp. 55-56.

[24] Venance Fortunat, *Poèmes*, t. 1, Livres I-IV, texte établi et traduit par Marc Reydellet, Paris, 1994, p. 28.

[25] Gregorii Turonensis Historiarum libri decem, lib.1, c.32, MGH, SRM, t,1, fasc.1, pars 1, Hanover, 1937, p. 25.

大理石製で、神殿の屋根は鉛板で葺かれていた」[26]。ここには商業の神メルクリウスの巨大な神像が、オーヴェルニュ平野を睥睨するように立っていた。古代世界で最大の神像の一つで、皇帝ネロの時代に建立された。クレルモンの人々はその製作をギリシア人の彫刻家ゼノドールに注文した。ゼノドールは製作に１０年の歳月をかけ、要求した制作費は４０万セステルスという法外な額であった[27]。

グレゴリウスが挙げるガリア語のもう一つの例は、かれの著作の一つ『聖証人の栄光Gloria Confessorum』に登場する。そのある箇所でかれは次のように述べている。「オータンにガリア語で[---]と称する共同墓地がある。それは多くの人々の遺体がそこに埋葬されるからである」[28]。この文章は肝心のガリア語で共同墓地を指した筈の部分が欠落していて、何やら曖昧な印象が拭えない。だがともかく、「共同墓地」を表現するガリア語が言及された事実は確認できるであろう。

こうしたガリア語の残存や、この言語への言及が日常的であったものの、全体として見れば、この古語は３、４世紀には生きた言語として使用されていたにしても、５世紀には明らかに衰退していた。最後のガリア語人名が登場するのは６世紀初めであり、それは６世紀の山岳地帯の農村住民の間で暫く生きながらえた。またガリア語の語彙の一部はラテン語の「田野風話法」に入り込み、７世紀には古フランス語の先祖の語彙の一部になるであろう[29]。

2.1.5　ゲルマン語の変遷

ゲルマン語という分類もその名称も、近代の産物であることは言うまでもない。しかし、この分類は有用であり、さしあたりわれわれはこの概念を用いて議論を進めることにしよう。

先にブリテン島のブリトン語（Pケルト語）を話す人々が、ゴイデル語（Qケルト語）を話す諸民族によって圧迫され、その多くがあるいは大陸のブルターニュ半島に逃れ、あるいはウェールズ地方に逼塞せねばならなかったことを述べた。これに加えて、５世紀には大陸のライン川河口地帯とユトランド半島の

---

[26] *Ibid.*

[27] Soazick Kerneis, Proto-féodalité. Vassaux et fiefs avant la société féodale, in *Les féodalités,* sous la direction de E. Bournazel et J.-P. Poly, Paris, 1998, p. 21.

[28] Gregorii Turonensis Gloria confessorum, c.72.

[29] Michel Rouche, *L'Aquitaine des Wisigoths aux Arabes. Naissance d'une region,* Paris, 1979, p.151.

間の大西洋沿岸の各地から、ゲルマン語系の言語を話すアングル人、サクソン人、ジュート人などがブリテン島の東海岸に侵入し、その勢力を徐々に西に広げた[30]。

かれらが移住を開始した理由については学者の間で意見が分かれている。ある者は、海水位が上昇する海進によって定住地が失われたためであったとするのに対して、別の学者は北西ヨーロッパ沿岸部での人口増大による圧力を挙げている[31]。

かれらは 750 年までに、フォース湾の南、セーヴァン川の東一帯を掌握した。しかし、この政治的成功が、この地域でのブリトン語の消滅をひき起すほど徹底したかは意見のあるところである。

アングロ・サクソン人たちが話した言語は、一般に古英語と呼ばれる言語であった。この言語の特徴は、北海周辺のゲルマン語圏という背景においてみるとより明瞭となる。ゲルマン語圏は南スカンジナヴィアを含めた、ヨーロッパ大陸の北西部四半分を包み込んだ領域である。キリスト教時代の最初の数世紀に、ゲルマン語はライン川、ドナウ川の線が区切るローマ帝国北辺の国境に沿って、その外側に定住した諸民族の言語であった。その後背地は北西ではエルベ川の氾濫平野まで、北東方向ではウクライナの草原地帯まで広がっていた。こうした集団に、ゴート人、フランク人、サクソン人、ランゴバルド人、フリーセン人、バイエルン人などがいた。

こうした中世初期のゲルマン語使用民族の言語的一体性については、イタリア出身で、シャルルマーニュの宮廷に招かれていたパウルス・ディアコヌス（c.720／30—c.799）が、アルプスより北で話されていたゲルマン語を見聞して述べた印象が示唆的である。6 世紀のランゴバルド王アルボイヌスの偉業を讃える歌が「バイエルン人やサクソン人だけでなく、同じ言語を話す別の民族でも歌われた」と語っている[32]。

やがてブリテン島東部やガリア北部を除いて、ゲルマン語使用者たちは数世代の経過の中で、自分たちの伝統的な言語を放棄して、地域の共同体に同化していった。ゲルマン語集団内部で、社会的・政治的大変動が急激な言語習慣の変化をひき起したのである。事情はケルト語世界でも同様であった。ゲルマン

---

[30] Lucien Musset, *Les invasions. Les vagues germaniques*, PUF, Paris, 1965, p. 150.

[31] *Ibid.* p. 151.

[32] J. Smith, op. cit., p. 21.

語内部で次第に、地域的分化が展開し、西暦千年紀の終わりにはそれが顕著となった。二つのかなり離れた、分化したゲルマン語集団の間の言葉によるコミュニケーションは、相当努力しないと相手の意味を理解できないような状態となったのである。ただ、この種の言語の分化に基づく差異の認識は、会話をしている当事者自身の間でも個人差があり、かなり主観的な現象である。９、10世紀イングランドへのスカンジナヴィア人（デーン人）定住の直前に、イングランドの著作家の一人は、スカンジナヴィア語と英語との違いを識別しているのに対して、１２世紀になってからでも、アイスランドに植民したあるスカンジナヴィア人の子孫は、アイスランド語と英語とが一つの言語であると断定している。

ゲルマン語集団は、長い時間の経過の中で、やがてスカンジナヴィア語、古英語、ゲルマン語の一方言で古高ドイツ語と称される言語に分化した。この分化現象は発音と語彙と語形が受けたインパクトにより生じたものである。それが著しかったのは４世紀から６世紀にかけてであった。ジュリア・スミスが最近出版した優れた著作で述べているところによれば、言語変化のインパクトをもたらした要素は単一ではなく、様々な要因が複合していた[33]。人間の移動はさして大きな要因ではなかった。おそらく大きかったのは征服とキリスト教化であった。それが言語変化、場合によっては言語消滅の潜在要因だったのである。付随的な要素として挙げられるのは、権力とキリスト教の言語であるラテン語が及ぼした影響である[34]。

2.1.6　ローマ帝国の言語

広大なローマ帝国全域にわたって公式の言語として、政治と経済、文化の万般にわたって君臨したのはラテン語であった。東ローマ帝国の首都コンスタンティノープルはギリシア語圏に属していたが、６世紀のヘラクリオス朝支配のもとでギリシア語で公文書が書かれるようになるまで[35]、ここでも統治・行政文書はラテン語で作成されていたのである[36]。ポスト・ローマ期にも、深刻な政治的、社会的打撃を蒙らず、キリスト教共同体が存続した地域では、ラテン語は以前

---

[33] J. Smith, op. cit., p. 22.

[34] *Ibid.*

[35] Jacques Fonataine, Education and Learning, in The New Cambridge Medieval History, vol.1., Cambridge, 2005, p.758.

[36] J. Smith, op. cit., p. 23.

と同じように話され続けた。ブリテン島西部でも６世紀までラテン語は使われていたが、その後は死滅してしまったようである。同じ時期にバルカン半島でもラテン語は、支配的言語であることを止めてしまった。この言葉は地中海地方西部とイベリア半島、ガリア、イタリア半島にその使用領域を縮小させた[37]。

古代ならびに後期古代に、リングア・ローマーナ（lingua romana）「ローマ人の言語」は、口語も文語もどちらもラテン語であった。ただ、それが発話されるとき、発音の仕方は地域によって非常に異なっていた。またエリートとそうでない者の間での、階層による発音の仕方も非常に異なっていた。しかし書き言葉としてのラテン語は、口語のような地域的、社会的差異はもっと少なく、ラテン語に本来備わっている保守的傾向、規範遵守、エリート主義的性格が保持された。こうした地域的、社会的偏差を濃厚に秘めた口語ラテン語や規範遵守的性格が強い文語、これら一切をひっくるめてリングア・ローマーナと総称したのである。

しかし、１２世紀になると「リングア・ローマーナ」とは、フランス語やワロン語、カタルーニャ語、スペイン語、イタリア語などの話し言葉を、書き言葉としてのラテン語と区別して表現するようになった。リングア・ローマーナの概念から、書き言葉としてのラテン語が外されたのである。

ポスト・ローマ期と中世初期に、話し言葉としてのリングア・ローマーナは益々地域的な差異を強くし、発音も変化した。しかし異なる地方出身のリングア・ローマーナを使う二人が、それぞれお国言葉としてリングア・ローマーナを使って話しても、相変わらず互いに理解可能であった。

ジュリア・スミスはその著書の中で、興味深い例を紹介している。953 年に、コルドバの大守でアラビア語を話したアブデル・ラーマン三世（912—961）が、ドイツ国王で、神聖ローマ皇帝オットー一世と外交使節を交わした。そのときカリフの外交使節を務めたのは、コルドバのキリスト教コミュニティーの一員で、アラビア語といわゆるリングア・ローマーナの両方を流暢に話せる者たちであった。オットー大帝が選んだ使節は、ゴルツェ Gorze 修道院の修道士ヨハンネスであり、この人物はリングア・ローマーナとゲルマン語とが混じりあう地方で生まれ育った。二組の外交団は、ドイツからスペインのコルドバに向かう長い道すがら、あらゆる事柄について語り合ったと、ヨハンネスの伝記が書き記している。かれらは自分たちが知っているリングア・ローマーナをそれぞ

---

[37] *Ibid.* p.22.

れ喋ったのである。コルドバとロレーヌ地方のリングア・ローマーナの発音法はそれぞれ随分違っていたにちがいない。それでもこの言葉を使っての会話は何の支障もなく成り立ったのであった。

そうした状況が変化し、相互に了解不能になるのはおよそ 1200 年頃であった[38]。

すでに何度も強調したように、リングア・ローマーナはそれぞれ地域的特徴を帯びながらも、北はモーゼル川地方から、南はスペインのグアダルキヴィール川に至まで、ローマ時代と同じように、単一の言語として機能した。元来ゲルマン語の話し手であった５、６世紀に部族国家を建国した人々の子孫は、長い間にわたって、先祖の言葉を放棄したのである[39]。

2.1.7　ギリシア語の帰趨

古典古代世界の文明言語として、ラテン語と並んで強い文化的規定力を有した言葉としてギリシア語がある。東地中海世界は話し言葉も書き言葉も、支配言語はギリシア語であった。ローマ帝国時代には、西ローマ諸属州でも、ギリシア語はエリートの教養言語として、尊重された[40]。西暦 500 年頃までには、ローマの知的エリート層は、ラテン語とギリシア語のバイリンガルであったのである。２世紀の皇帝マルクス・アウレリウスは、自らのストア派的思想により自己検証を記述した『自省録』を、ギリシア語で執筆しているし、背教者として知られる４世紀の皇帝ユリアヌスもまた、しばしばギリシア語で書き記した。

逆の形が、４世紀の軍人で歴史家であったアンミアーヌス・マルケリーヌスである。かれはギリシア出身であったが、その著述『歴史 Res gestae』をラテン語で叙述したのである。このように、知識人層においてはラテン語とギリシア語が、あたかも二言語併用（バイリンガル）の使用言語のように用いられた。

バイリンガル的状況の掉尾を飾るのが、ボエティウスとカッシオドルスであろう。ボエティウスは正式な名前をアニキウス・マンリウス・トルクォトゥス・セウェリヌス・ボエティウス Anicius Manliusu Torquatus Boetius と称し、ローマの由緒ある名門アニキウス一門に連なる貴族であった。学問分野の区分けで自由七科 artes liberales と呼ばれるのは、文系の三科 trivium「文法、論理学、

---

[38] J. Smith, op. cit., p. 24.

[39] *Ibid.*

[40] *Ibid.* p. 23.

修辞学」と理系の四科 quadrivium「算術、幾何学、天文学、音楽」から成る。ボエティウスはこの四科の内容を整理して枠組を作り、それに「四科」の名称を与えた最初の人物であった。またかれはアリストテレスの著作をギリシア語からラテン語に翻訳する計画に着手した。しかしその作業は、かれが謀反人の嫌疑をうけて処刑されてしまったために、525 年に途中で挫折してしまった。だが、幸いにしてアリストテレスの論理学だけは翻訳していたために、その後 500 年にわたって西欧での唯一の権威として君臨したものの、他の著作は１２世紀にアラビア語からの翻訳として紹介されるまで、ヨーロッパでは知られていなかった。

533 年に東ローマ皇帝ユースティーニアーヌス一世が開始した、国土回復遠征は、それまでの東西の交流を、断絶状態には行かないまでも、著しく停滞させ、その結果、西方ではギリシア語を理解できる知識人は例外となった[41]。

ギリシア語の圏の縮小はスラブ民族の言語がヨーロッパ東部に普及することによっても促された。黒海周辺の草原地帯は古くからギリシア語圏であった。聖書をゴート語に翻訳したウルフィラUlfilaは、４世紀の初め、東ゴート族の捕虜となったローマ人の両親から生まれた。この「小さき狼」はこの時期南ロシアから黒海を横断して、盛んに小アジアを略奪していた東ゴート人に、かれの両親は捕虜として拉致されたのであった[42]。ウルフィラは後に長じて、ドナウ川の下流にあるニコポリスに住み着き、旧約（列王記を除く）聖書、新約聖書をゴート語に翻訳する事業を開始した。その方法はまことに単純であった。かれは当時の標準的なギリシア語聖書を基にして、そのギリシア語をゴート語にただ置き換えるというということをしたのである。その翻訳というのは、したがってゴート語よりはギリシア語の文法と統辞法（シンタックス）に大きく依存したものであった。そうしたゴート語の語彙はともかく、ゴート語文法については教えることの少ないゴート語聖書は、コーデクス・アルゲンテウスとして、スウェーデンのウプサラ大学図書館の蔵書として厳重に保管されている[43]。そうした限界はあるものの、あらゆるゲルマン語の中で、ゴート語は最初に文字化された言語として特筆しておかなければならない。文字表現を知らない言語が、文字化を実現するというのは、想像以上に困難を極める作業である。この点に

---

[41] Jacques Fontaines, op. cit., p. 742.

[42] この時代のゴート人の事情については、いまや古典となったE. A. Thompson, *The Visigoths in the time of Ulfila*, Oxford, 1966 参照。

[43] Peter Heather, *The Fall of Roman Empire. A New History*, London, 2005, p.78.

ついては、後にあらためて議論するつもりである。

四世紀の黒海周辺やドナウ川下流地帯は、ギリシア語が一般的なコミュニケーション手段であった世界であったことが、ウルフィラを巡る状況からも知られる。

2.1.8　スラヴ語の進出

バルカン半島へのスラヴ民族の進出が、いつ頃始まったかについては、いまだ論争があり定まってはいない。スラヴ人についての最初の言及は、６世紀半ばのビザンツの歴史家で、ほぼ同時代人のヨルダーネスとプロコピウスである。かれらの言によれば、スラヴ人の王国はドナウ川の北岸にあった。だが、果たしてスラヴ人たちが共通のアイデンティティを持った民族であるかどうかは、議論の分かれるところである。バルカン半島北部や中部のスラヴ人による征服が、ギリシア語をバルカン半島から駆逐して、かれらの文化と言語がエーゲ海の突端にある南のテッサロニキまで及んだのは確かだとしても、文化変容の原因が何かは依然不明である。

８世紀までには、スラヴ語の幾つかのバージョンがエルベ川以東の中央ヨーロッパの多くの場所で話され、その中にはかつてゲルマン語が支配的な地域も含まれていた[44]。

フローリン・クルタによれば、あたかもスラヴ民族という一纏まりの民族集団が存在するかのように記述したのは、ビザンツ帝国の歴史家たちであった。スラヴ人の単なる一集団が自称していた名称を、誤って大きな言語共同体の名称であると理解した可能性が指摘されている。

そもそも言語というものが、エトノス共同体が興隆する前提条件であったかという問いに対しては、スラヴ民族に関しては否である。第一にスラヴ勃興の同時代の著作者が、スラヴ人と見なす人々が単一ではない、異なる複数の言語を話している事実を記録している。

第二に、共通スラヴ語が、公用語としてアヴァールの汗が支配している領域の内部と外部の双方で使われていて、このことはこの共通スラヴ語が、地方言語を排除しながら、東ヨーロッパの大部分に普及したというよりダイナミックで、より妥当な筋書きを可能な想定としてくれる。またこの想定はこの言語が

---

[44] スラヴ民族の登場と膨張についての最新の研究として、Florin Curta, *The Making of the Slavs. History and Archaeology of the Lower Danube Region, c.500-700*, Cambridge, 2001 参照。

九世紀を通じてかなり安定し、著しく統一的であることも説明してくれる。マケドニアのスラヴ人が話していた言葉をもとに作られた古教会スラヴ語が、後にはモラヴィアでもキエフ公国のルーシ人のもとでも理解されたという事実によっても補強される。パウルス・ディアコヌスが報告している、ベネヴェント大公ラドゥアルド Raduald のエピソードからも同じ結論が引き出される。すなわち以前はフリアウル Friuli の大公であったラドゥアルドは、ダルイマティアから海を渡ってベネヴェント公国に侵入したスラヴ人と会話することができた。それというのも、フリアウル大公国は、定期的に近隣に住むスラヴ人の侵略に曝されていたのであり、ラドゥアルドはフリアウル大公時代にスラヴ語の会話能力を身につけたと推定されるからである。フリアウル大公国の北に住むスラヴ人たちは、明らかにダルマティアのスラヴ人と同じ言語を話したのである。

865 年のキリスト教改宗以後は、ブルガリアでもスラヴ語は公用語となった。この改宗という宗教的・政治的発展との結びつきによって初めて、スラヴ語は他の言語との密接な接触をするようになったのである。バルカン半島に、かなり早い段階でスラヴ語を話す集団がいた筈なのに、この地域の非スラヴ語—ルーマニア語、アルバニア語、ギリシア語—への影響は最小限度に止まり、ブルガリア語やセルヴォ・クロアティア語やマケドニア語よりも、遥かに小さな影響しか受けていないことも、これで説明できる。バルカン半島での共通スラヴ語の影響が殆どなかったことは、この地域にスラヴ起源の地名が少数しか見つからないことでもわかる。これら少数の地名は、音韻学的に見て、おおよそ西暦 800 年より前と推定される。スラヴ人がスラヴ人となったのは、かれらがスラヴ語を用いたからではなく、他者によりそのように呼ばれたからであるにすぎない[45]。

＊

われわれのこれからの考察の基礎となる、ポスト・ローマ期ヨーロッパの言語状況の概要は以上の通りである。これらの事実に必要な情報を適宜付加しながら、この時代の言語的、図像・絵画的、文字記録的コミュニケーション論の諸問題を考えてゆくことにしよう。

2. 2. ラテン語はいつ話されなくなったか—ガリアの状況—

[45] F. Curta, ibid., pp.344-346.

2.2.1　ガリアにおけるラテン語とラテン文化の確立

西ローマ帝国の公式言語としてラテン語が確立した過程は、都市国家ローマの軍事的征服による膨張と軌を一にしていた。ある学者は特定の言語がその使用領域を拡大してゆくとき、その最も重要な要因となったのが、軍事的征服と宗教であったと述べたが、まさしくラテン語の普及はその典型的な実例の一つである。

紀元前 700 年頃、イタリア半島の中部に学者がイタリキと名付ける言語を話す民族が棲んでいた。かれらはさらにラテン人とウンブリア人集団に分かれて生活していた[46]。ローマの七つの丘をその政治的中心として、主に牧畜を生業として営んでいたようである。人類学者ノルベルト・ルランは、共和政時代ローマの国制の基本構造をなした、貴族と平民の身分的編成を基礎づけたのは、この地への到来の時間的遅速であったとし、貴族を表現するpatriciusという言葉は、もともと先住民であった牧人pastoriciusに由来するとする。この地方の牧人文化的伝統は、極めて強固であった[47]。

中部イタリアに発するラテン人の拡大の過程を縷々詳しく述べることはしないが、ラテン人の形成したローマ国家の言語としてラテン語は、かれらの征服の歩みと手を携えて普及していった。紀元前５８年から前５１年にかけて、カエサルはガリアをロ―マの掌中に入れるための遠征を行い、成就させた。軍事的、政治的支配は、文化的覇権の確立をもたらす。ローマ国家は、しばらくの間駐屯軍を置いて、ガリアに睨みを利かせたが、前２７年から前１６年にかけて初代元首アウグストゥス帝が本格的なガリア経営に乗り出した。かれは早くからローマに帰順していたナルボンヌ管区を元老院領に、新たに征服したアクイタニア、ルグドゥネンシス、ベルギカの三管区を皇帝領に編成した。こうしてローマによる行政が開始し、ラテン語が本格的にローマ領ガリアの公式の言語とされ、土着のガリア語は２世紀頃に話されなくなったと考えられている。

さてわれわれがこれから問題にするのは、このようにしてガリア語を駆逐して（これは決して同じ時期に一律に起こったことではなかった事実も、強調しておかなければならない)、ガリアの公式言語となったラテン語が、ローマ帝国の没落とともに、いつの時点でガリア（現在のフランス）から消滅したのかと

---

[46] テオドール・モムゼン著, 長谷川博隆訳『ローマの歴史. I. ローマの成立』名古屋大学出版会, 2005 年, 10 頁.

[47] Norbert Rouland, *Rome, démocratie impossible? Les acteurs du pouvoir dans la cité romaine.* Le Paradou, 1981, p. 27.

いうことである。

ラテン語とラテン文化がどれほど素早く、また徹底してガリア社会に浸透したか、また言語を核に構成されている「ローマ風」文化を自らのアイデンティティとすることが、どれだけの栄達をその人物に約束するか、さらにはこのように開かれたローマの統治・文化システムが、どれほど繁栄期の帝国にとって有能な人材のリクルート機能として有効で、国家の強みとなったかを、４世紀ボルドーの詩人アウソニウスを例にとって見ておこう[48]。

ローマ帝国の確立後間もなく、帝国の二つの言語、すなわち西方ではラテン語、そして東方ではラテン語プラス、これを補助する言語としてのギリシア語が、帝国の新しい臣民となった、とりわけ富裕な階層がいち早く学び、土着の言語に加えて新たな言語的コミュニケーションの手段とした。こうした事態は、かなり早いスピードで展開し、ラテン語の文法教師は帝国各地の都市で、活動を展開した。アウソニウスの先祖が出た中部フランスのオータン Autun には、西暦 23 年に早くもラテン語を教える学校ができている。ひとたびこうした学校が設立されると、ラテン語とラテン文学の集中的な訓練の学校が、各地に設けられた。４世紀までには、文法教師の指導による優れたラテン語教育が、どこでも受けられた。ブリテン島北西部の小規模な土地所有者の息子に生まれた聖パトリックが書き残した書簡を読むと、西暦 400 年頃には帝国の僻地においてさえしっかりしたラテン語教育が受けられたことを示している。

同じ頃のもう一人の偉大な思想家聖アウグスティヌスを例に挙げてもよいであろう。このラテン著作家の中で最高の人物は、ラテン語教育の優秀さで定評のあった北アフリカに生まれ育った。

ラテン語の習得は、土着の人間にとって単にローマ人との取引の利便といった実利的要素が主な理由ではなかった。文法教師や、かれらが提供するラテン語教育を受け入れることは、こうした教育のみが優れた人間に仕立て上げることができるのだという信念と価値体系全体を受け入れることなのである[49]。

征服されたガリアがローマ風の文化を受容するのは一夜にして、成し遂げられたわけではなかった。だが、それは比較的短期間、二ないし四世代のうちに達成された。イングランドのハドリアヌスの長城から、ユーフラテス川まで多

---

[48] アウソニウスについての最新の研究は、Hagith Sivan, *Ausonius of Bordeaux. Genesis of a Gallic Aristocracy,* London / New York, 1993.

[49] P. Heather, op. cit., p. 37.

少とも均一な仕方で政治文化、生活様式、価値体系が確立すると、この広大な空間に棲む全ての人々は、身分的な格差を別にして、すべてローマ人であった。「ローマ的Romanus」という表現は、もはや地理的な概念ではなく、潜在的にはすべての住民が身につけようと思えばそれが可能な文化的アイデンティティとなった。早くも西暦 69 年にガリアでは、こうした新しく急速に勃興して来たアイデンティティに抵抗する反乱が起こっている。だがそれは敗北した[50]。こうしてラテン語、ラテン文化はガリアに揺ぎない覇権を樹立したのである。

2.2.2　ラテン語教育の実像

いま少し具体的にラテン語教育の実態を見ることによって、若いローマ人の知的涵養という問題を越えて、ラテン語教育が単なる書き言葉、話し言葉の教育だけでなく、ローマ人の文化的アイデンティティの形成の役割をも担っていた事実を認識しておかなければならない。

ラテン語教育システムの根本は、限られた少数のテクストを、集中的に勉強するところにあった。それを指導したラテン語と文学解釈のエキスパートであった文法教師であった。それが 8 歳頃からおよそ 7 年かそれ以上続いた。テクストはウェルギリウス、キケロー、サルスティウス、テレンティウスの 4 人のものにほぼ限られた。それを終えると、修辞教師の手にゆだねられる。ここではもっと多くの著作家の文章が学習の対象となった。しかし勉強の方法は、おおむね同じであった。文章を一行一行読み上げられ、表現の一つ一つが必ず、どの作家を手本にした表現かが吟味され、それについての議論がたたかわされた。授業で課される練習問題は、たとえば毎日の生活や出来事を、よく知られた文人の文体を真似て作文するというような内容であった。一例を上げるならば、「戦車競走の情景をウェルギリウスの文体で綴りなさい」、と云うような[51]。

こうした文学テクストは、その中に“正しい”ラテン語の規範が保たれている文章で、子供たちはその勉強を通して、使われている個々の語彙と、複雑な文法の両方を学んだ。こうした遣り方がもたらしたものを一点挙げるなら、教育あるラテン語というものを護る役割を果たしたということである。文化的な弊害であった言語変化のプロセスを阻止するか、あるいは、その変化の速度を緩やかにした。

---

[50] *Ibid.* pp. 44-45.

[51] 以上はすべて、*Ibid.* p.17.

こうした学習と訓練の結果、ローマ人エリートが口を開けば正式のラテン語を学んだことがたちどころに判然とした。これはピーター・ヒーサーによれば、現代の教育制度で集中的にシェークスピアの文章を勉強する目的が、生徒がシェークスピア風の英語を話す能力を習得したかで、互いを選別するのに喩えられるという。

また言語とは別に、これらのテクストの中に盛り込まれた内容を吸収することにより、人間的な度量を身につけさせるという重要な面があった。ラテン語文法というのは、4 世紀の文人で政治家のシンマクスによれば、論理的で、厳密な思考を育てる手段でもあった。直接法、接続法、条件法などの話法 mood や、動詞の時制 tense がきちんと使いこなせなければ、自分の意志を正確に伝えられないし、事物や事態の有様、関係などを正しく表現できない。文法は言い換えれば、形式論理学の訓練でもあった。

ローマのエリート階級は、かれらが学んだテクストを、よい手本も悪い手本も含めて、人間の行動倫理や判断基準のデータベースとも考えた。為すべきこと、為してはならないことをそれで学んだ。誇り、寛容さ、愛などの人間の徳目と、それがどのような結果を生み出すかの古今の具体的な事例も学んだ。古今の実例で示される悪しき振る舞い、または立派な行動についての思索が、知性と感情の両面で最高度の達成をもたらし、人格を磨くのである。真の慈悲とか真の愛、真の憎しみ、真の賞賛といった感情は、教育を受けない人間には生まれないと、かれらは考えたのである[52]。

大まかに云えば、これが正式なラテン語教育を受けたローマのエリート階級の姿であった。こうしたラテン語の古典的で厳格な教育を受けた人々が話すラテン語のことを、人々は都会風話法 urbanitas と形容した。都市を生活の場とする教養人士の洗練された話法という意味がこの「ウルバニタース」という表現に込められている。

2.2.3　セルモ・ルスティクス sermo rusticus と「卑俗ラテン語」

だが当時の社会の多数派を占めていたのは、正式の学校教育もラテン語の教育も受けることがなかった人々であった。セルモ・ルスティクスはそうした話法を表現する言葉である。「ルスティクス」とは田舎の住人というほどの意味で、主に農民のことを指している。教養を身につけた都会の住人と文化的に対局に

---

[52] *Ibid.,* p.18.

ある存在として、こうした話法で語る人間が想定され、その世界として田園世界が想定されているのである。

だが、こうした階層の話法を直接知ることは、実はかなり困難であることを認めなければならない。こうした社会層は、一般に文字を書き記す習慣がないので、かれらの話したラテン語がどのようなものであったかを、それとして後世に書き残される例は、極めて稀である。

かつて、ラテン語学者たちは、「ウルバニタース」によって代表される古典的文法に忠実なラテン語に対して、文法の規範から外れ、簡略化され、口語的表現に富んだ、いわば庶民の話したラテン語を、「卑俗ラテン語」Vulgar Latin として区別した。19 世紀後半には、ヴィルヘルム・マイヤー＝リュプケ Wilhelm Meyer-Lübke のような比較言語学の大家は、古典規範のラテン語と卑俗ラテン語とが、あたかも二つの別の言語であるかのように見なしたのである。ラテン語という言語世界が、それぞれあたかも二つの言語であるかのような異なる言語で構成されていた。そして、両者の間には基本的に相互交流はなかったと考えた。

だが現在こうした見方を取る有力な学者はいない。古典ラテン語といわゆる「卑俗ラテン語」との関係は、より柔軟で、相互浸透の関係にあり、一つの言語の二重システムと考えるべきというのが、多くの研究者が一致して認める意見である[53]。そして現在では、卑俗ラテン語を端的に、「話されたラテン語」、「口語ラテン語」と定義することが、認められている[54]。話されたラテン語が、即卑俗ラテン語とは云えないものの、口語話法の代表格がセルモ・ルスティクス、すなわち「田野風話法」であったと想定してさしつかえない。

2.2.4　ダイグロシア diglossia

このような、書き言葉と、幾層かの複数の話し言葉のバージョンが併存する言語状況が、どのようなコミュニケーション構造を構成することになるのか、この点を解明してくれる理論的手段として、社会言語学者C. A. ファーガソン Fergusonが提唱したダイグロシアの概念がある[55]。

---

[53] Michel Baniard, *Genèse culturelle de l'Europe, Ve-VIIIe siècle*, Seuil, 1989, p.191; ジョゼフ・ヘルマン著, 新村猛／国原吉之助訳『俗ラテン語』クセジュ文庫（498）,白水社, 1971 年, 16 頁.

[54] *Ibid.*

[55] C. A. Ferguson, Diglossia, *Word*, 15, 1959, pp.325-340 参照.

ダイグロシアとは二つの言語あるいは方言とか変種（language variety）が同時に社会に存在している状態を指す、と定義されている[56]。われわれがいま問題にしているラテン語の場合は、「書き言葉」と、「話し言葉」との相互関係であるから、一つの言語の相互に異なる二つの変種の併存の問題である。その定義は次のように続ける。「威信の高い変種（High variety）」と「威信の低い変種（Low variety）」が存在し、それぞれ特別の機能をもち、言語の使い手は二つをまったく異なる言語と考えている。威信の高い変種は、威信の低い変種より美しく、論理的で、表現力が豊かだと考えられている。したがって、威信の高い変種は文学や宗教に利用され、威信の低い変種は日常生活に使用される。威信の低い変種は家庭で習得され、威信の高い変種は学校で習得される」。これは言語学事典による一般的定義である。

ベルギーの中世史家で、古代から中世にかけてのコミュニケーション問題に詳しいマルク・ファン・ウィトファンゲMarc van Uytfangheは、「ダイグロシア」の概念をさらに練り上げる意図で、次のように主張している。「ダイグロシアは二つの異なる言語の存在を示す言葉ではない。それは語彙、形態、統辞などの面で違いがあり、発音面ではあまり原理的な差異がない同一言語の二つの変種、あるいは二つの記録形態である。一つは日常的会話言語であり、もう一つは規範化された“高等言語”である。おなじ言語のこの二つの形態は、その間に多様な変種が数多くあるものの、それ独自の機能をもち、相互の理解の面では、「低い変種」である日常会話形式を自己の言語とする者でも、「高等言語」を受動的に理解でき、その点においては両者のコミュニケーションは支障なく成り立つのである」と[57]。

つまり発音原則に大きな違いがないかぎり、それぞれ異なる二つの話し言葉—例えば、書き言葉そのままの純正ラテン語で話す高位変種の話し言葉と、庶民の日常の話し言葉である低位変種—に属する者が、自分のものとは別の記録形態を理解することが可能であったのである。ある言語をもっぱら受け身に理解するだけの能力を、受動的言語能力、そして話された言語をただ理解するだけでなく、その言語を書いたり、話したりする能力を能動的能力とするならば、ラテン語の「ウルバニタース」と「セルモ・ルスティクス」との間では、それ

---

[56] 岩田祐子「ダイグロシア」, 小池生夫編『応用言語学事典』, 研究社, 2004 年, p.240.

[57] M. Van Uytfanghe, Histoire du latin, protohistoire des languesw romanes et histoire de la communication. À propos d’un recueil d’études et avec quelques observations preliminaries sur le débat intellectuel entre pensée structurale et pensée historique, *Francia*, t.11, 1983, p. 599.

ぞれの受動能力によって、互いに相手が話していることを理解できた。常日頃文語ラテン語に近い話法の世界で生きている話し手も、一度も学校でのラテン語教育を受けたことがない農民の話しを理解できたし、反対に農民のほうは自分で優雅な話法で話すことができなくとも、そうした話法で話されたことを理解できたのである[58]。

2.2.5　キリスト教の影響—セルモ・フミリス sermo humilis の普及—

ジュリア・スミスは、すでに述べたように西ヨーロッパで起こった言語変化の大きなインパクト要因として、軍事的な征服とキリスト教の発展を挙げていた。まさしくキリスト教は、新たな話法をこの宗教の布教のために、そして信徒のあいだに恒常的なコミュニケーションを築くために必要であった。

台頭しつつあったキリスト教は、「ウルバニタース」を自らの言語レジスター（言語を記録する形態で、話し言葉や文字などの形式）とする教養人を、第一級の担い手とした。テルトゥリアヌス、ヨハネス・クリソストモス、アンブロシウス、アウグスティヌスなどが、その代表格である。かれらは同時代の卓越した文筆家であり、知識人であり、雄弁家であった。かれらの活躍は言語の審美意識に変化をもたらすと同時に、庶民へ信仰を説くために、大衆の言語レジスターであるセルモ・ルスティクスに接近しなければならなかった。こうしたエリート教会人の言語能力と知識にふさわしい、大衆への接近レジスターとして生まれたのが、「謙虚なる話法 sermo humilis」と称される話し方である。

これは単純で控え目な表現法を旨とし、弁論術の分類法で謙譲話法 submissum と呼ばれる。聖アウグスティヌスは説教の名手であり、数千にのぼる説教のうち、かなりをセルモ・フミリスで語ったとされている。このセルモ・フミリスは弁論術の一カテゴリーであって、それなりの技法と話法上の伝統を具えた形式である。非学識的で、「無学」を特徴とするルスティクスとは、根本的に異なっている。とは云え、一流の知識人であり、弁論術のスターであった先の教父たちが、いたずらに高踏的な高位変種の話法を離れて、庶民の能動的な言語レジスターに近い話法で語ったことは、話し言葉としてのラテン語のその後の在り方に大きく影響を及ぼした。

教会人は、農民が操る田野風の話法を十分に理解することができた。だがか

---

[58] 以上については、佐藤彰一「識字文化・言語・コミュニケーション」, 佐藤／早川編『西欧中世史（上）継承と創造』, ミネルヴァ書房, 1995 年, 215-237 頁参照。

れらは自分でルスティクス話法を話すことはなかったのである。かれらにはセルモ・フミリスがあったので、その必要が感じられなかったのである。ところが六世紀末になると、セルモ・フミリスがセルモ・ルスティクスとあまり明確に区別されないようになってくる。『歴史十書』を著したトゥール司教グレゴリウスは、この作品の序文で「哲学的な修辞表現を理解する者は少なく、田野風の話法を理解する者は多い Philosophantem rethorem intellegunt pauci, loquentem rusticum multi」と記して、ルスティクスのスタイルで執筆することを宣言しているのだが、真意は簡素な形式であるフミリスの文体で書くという意味であったに違いない。

ミシェル・バニアールによれば、ポスト・ローマ、中世初期を通じて、識字層の口語と非識字層の口語とは、決して一つのものになることはなかったにも関わらず、もともと識字層の謙譲話法であったセルモ・フミリスの本来の性格が忘れられ、文字文化との関係が稀薄な人々の話法であるセルモ・ルスティクスという表現で表されるようになったという。バニアールによれば、農民とのコミュニケーションに用いられた話法は、６世紀以後すべて田野風と表現されるようになった。

７世紀になると、話し言葉としてのラテン語が「混成語 lingua mixta」と表現されるようになってくる。この表現を用いたセヴィーリャ司教イシドルスや教皇グレゴリウス一世らは、話し言葉がセルモ・ルスティクスから別種の言語に変わりつつ事態を指摘しているように思える。

*

さてこうして、われわれはようやくラテン語がいつからガリアで話されなくなったか、という問題を論ずるところまで来た。その問題はもっと具体的に言換えるならば、話し言葉がラテン語に代わって、現在のフランス語やイタリア語やスペイン語の祖先となるロマンス語がいつから話し言葉となって登場するか、という問題である。以下、幾編かのまったく同じ論題で研究を発表した歴史家の論を追って、この問題を考えてみよう。

2.2.6　西暦５００年以前説

最初に紹介するのは、話し言葉としてのラテン語が著しく早く死滅したと主張

する学者たちの説である。これが極端な説であることは、誰の目にも明らかであるが、音声学という理論的根拠に基づく考えであり、一応紹介しておこう。

E・パルグラム Pulgram は、紀元前３世紀生まれのプラウトゥスの時代からロマンス語的変化が兆していると考えている。他方で、G・ボンファンテ Bonfante は西暦一世紀からイタリア語が登場すると主張する。これらは極端な説である。多くの早期交替説の論者は４、５世紀を決定的な時代と考えている。この考えは１９世紀後半のドイツの文献学者の所説で、F・ディーツ、G・グレーバー、W・マイヤー＝リュプケなどの名前が挙げられる。

この説はすぐにロマンス語の教科書で通説としての位置を占め、続いてこの時代のラテン語を扱った様々な研究書で受け入れられ、今日まで続いている。

この説は 1931 年に、フランスの中世史の大家であったフェルディナン・ロトが発表した「ラテン語はどの時期にガリアで話されなくなったか？」という論文で、とくに歴史学の観点から、増補され、あらためて主張された。ロトは歴史家として、この時代を彩る末期的な社会情勢をとくに強調し、時代の暗い色調、ラテン語で書かれた作品の出来の悪さ、崩れた言葉使い、こうした要素がかれをして、この時代に使われた話し言葉の言語はもはやラテン語の面影はなく、ロマンス語の嚆矢と見るべきという考えに決定的に傾けさせた[59]。

2.2.7　西暦７００年以後説

この極端な見解に対して、いわゆる「アメリカ学派」を創設したH・F・ミュラーは、今世紀の初頭に批判を展開した。結論としては、ガリアでは８世紀後半まで話し言葉はラテン語であり続けたという、いささか楽観的に過ぎる説であった。とくにメロヴィング朝時代を、キリスト教の布教と人々のあいだへの浸透に助けられて、自由とデモクラシーと創造性が発展した時期であったというかれの見方は、到底受け入れられない歴史像と云える。しかし、かれの弟子たちは師の説を擁護する論陣をはり、両大戦間期にさかんに発表した。その説によるならば、ラテン語はガリアで話し言葉として 770 年ころまで、イタリアやスペインではもっと遅くまで存続した。ラテン語の消滅とロマンス語の誕生との間には、一、二世代しか間隔がないということになる。

こうした結論は多くの批判を呼び起こした。その中にはもっと後の時代まで

---

[59] Michel Baniard, *Viva Voce. Communication écrite et communication orale du IVe au IXe siècle en Occident latin*, Paris, 1992.pp.17-18.

ラテン語が話されていたとする見解も出された。M・リヒター、G・サンダース、R・ライト、P・ツムトールなどの論者がそれである。リヒターやライトはラテン語が一般的な言語コミュニケーションとしての終焉を迎えるのは 800 年頃であるとしている。サンダースやツムトールはもっと後まで続いたという説である。

2.2.8　西暦６００年以後説

時代的にこれら二説の中間に位置する第三の説として、西暦 600 年以後に話し言葉としてのラテン語の消滅があったとする考えがある。これを主張する代表的な学者はスウェーデンのダグ・ノルベルグDag・Norbergである。ノルベルグによれば、庶民の話し言葉は 600 年頃までラテン語の構造を示していた。他方で、西暦 800 年以後には決定的にロマンス語になったという。つまりかれに云わせれば、この二つの時期の間に、ラテン語からロマンス語への転換が生じたということである。この考えでは言語慣習という点で、６世紀は「古代後期」に属することになる。この見方は、実はトゥールのグレゴリウスの言語を研究したマックス・ボネMax Bonnetが明らかにしていた事実であった[60]。だがそれは当時ほとんど注目されなかった。ノルベルグの所説はこれを再び取りあげたものである。

ノルベルクの説は、E・レフシュテット Löfstedt、Chr・モールマン Mohrmann、G・ライヘンクロン Reichenkron などが支持している。この説は現時点でのこの問題の正典となっている。

2.2.9　話し言葉としてのラテン語消滅のプロセス

われわれは既に、以下のように述べた。すなわち「７世紀になると、話し言葉としてのラテン語が「混成語 lingua mixta」と表現されるようになってくる。この表現を用いたセヴィーリャ司教イシドルスや教皇グレゴリウス一世らは、話し言葉がセルモ・ルスティクスから別種の言語に変わりつつ事態を指摘しているように思える」。ところで今、駆け足で見て来た話し言葉としてのラテン語消滅についての三説との関わりあいで、先の認識を捉えるべきか。時代区分で見れば、これは第二説か、第三説か微妙である。歴史家としての私の考えはど

---

[60] Max Bonnet, *Le latin de Grégoire de Tours*, Paris, 1890.

ちらかと云えば、第二説に近いと云える。

おそらく転換は７世紀に兆していた。それが最終的な形をとって急速に展開するのは、８世紀末の古典ラテン語の復活を目的とした、カロリング・ルネサンスと呼ばれる「文化運動」の余波として決定的な過程が進行したものと思われる。この点をもう少し詳しく説明することにしよう。

ポスト・ローマ期、中世初期に、ラテン語が社会の各層を貫いて共通のコミュニケーション手段として充分機能していたとする社会言語学の認識は既に述べたが、その前提となるのは発音原則の共通性であった。ラテン語の「高位変種」を用いた識字層と、「低位変種」を生活言語の手段とする文字使用の稀な階層間で、それぞれ異なる記録形態を用いながらもコミュニケーションがさほどの障害もなく成り立っていたのは、たとえば書き言葉としてのラテン語が発話されるとき、発音の規則が共通していれば、庶民にもその内容が理解できたからである。

アウグスティヌスは『弁論術について』という作品の中で、次のように語り、コミュニケーション手段としての言語の音声化された側面の重要性を深く認識していた。その箇所を引用しよう。「あらゆる言葉は一つの音である。それが書かれるとき、それは言葉ではなく、言葉のしるしなのである。われわれが文字を読むとき、われわれが見る文字が心に語りかけるのは、発声された音なのである」。

ここで重要な人物が登場する。イングランドのヨーク出身で、請われてシャルルマーニュの師傅となったアルクイヌスがその人である。かれはイングランド出身で、もともとの母語はアングロ・サクソン語であった。かれはむろん当代随一の知識人としてラテン語は完璧にマスターしていた教会人であった。鍵となるのは、かれが学識言語として、ラテン語を習得したという事実である。つまりアングロ・サクソン世界では、話し言葉のラテン語は無縁の言語であったために、かれが習得したラテン語は大いに古典規範に忠実なラテン語であった。その目で大陸に渡ったとき、かれが目にしたのは著しく古典の規則から外れたラテン語の有様であった。かれは考える。神の言葉を正しく伝えること、そしてそれが書かれた言葉を媒介にしてなされるとき、その基本となる書物は完璧な、誤解の余地のない読みやすい仕方で筆写されなければならない。アルクイヌスは次のように云う。「神の法の表明や、教父の聖なる言葉を筆写する者は、来たりてここに座るがよい。ここで、かれらの手が無用な言葉を挿入し、

愚かな誤りをおかさぬよう躾けせしめよ。かれらをして、なんとしても校訂の行きとどいたテクストを作り出そうという決意と、そのペンが正しい筆使いで走るよう訓練せしめよ。かれらが句読点を用いて、正しい意味を伝え、読み手が教会で敬虔なる兄弟の面前で読唱するおり、いかなる誤りもおかさず、また突然の絶句に陥ることの無きようになさしめよ」。

これは書き言葉としてのラテン語の純化運動とも呼ぶべき動きである。句読点法の普及や、読みやすいカロリング小文字の発案は、いずれも書き言葉としてのラテン語に対する厳格な態度の所産であった。アルクイヌスはすべての文字を正しく発音すべしと主張する。よくあるｉとｅの混同、ｂとｖの混同などはみな、話し言葉としてのラテン語に引きずられた結果の誤用である。

こうしてかれは文法の古典規範への復帰と平行して、正書法の確立と、発音上の古典主義への復帰にも力を注ぐことになる。かれの著作『正書法について De orthographia』はそのマニフェストであった。

こうした事態の展開はいかなる帰結をもたらすことになったか。社会言語学的に云えば、それは発音体系の一体性を基礎とするダイグロシアの消滅をもたらした。いまや古典的規範に忠実に発音されることになったラテン語は、文字世界との関わりをもたない人々には理解不能の言語になってしまう。書き言葉としてのラテン語から切り離された話し言葉は、こうして決定的にロマンス語への道を歩み始めることになる。

3.　文字表象の理路

言葉と文字は、ふつう一対の組合せと考えられていて、現代社会で云えば南米やアフリカの奥地に棲む未開の民族を別にして、自らの言葉を表記する文字の体系をもっている。その体系は当該民族の長い歴史のなかで変容しながら、独自に考案された場合もあれば、歴史のある段階で別の民族のそれをそのまま借用して今日にいたる場合、あるいは借用したものに手を加え、独自な表記体系を作り出すような場合もある。日本語の仮名文字はさしずめ、そうした部類に入るであろう。

こうしたことからも分かるように、言葉とその表記手段である文字とは、緊密に結びついた現象でありながらも、まったく同一の現象というわけではない。言葉を持つことと、それを表現する独自の文字体系を持つこととは同じではないのである。そこから、文字手段をもつことが、固有の文化現象であり、コミ

ュニケーションの様式から、社会の組織化の形態にいたるまで、多様な局面で独自の刻印を社会に刻みつけるのではないかという知的展望をもたらす。ケインブリッジ大学の人類学者ジャック・グッディJack Goodyは、アフリカ人類学から出発して、ユーラシア大陸の先進文明圏をも視野に入れた研究プロジェクト「リテラシー、家族、文化、国家」を発案し、何冊かの研究成果を継続的に発表している[61]。人間の認知プロセスにとっての脱文脈化された（リストや表形式の文書）文字表象の意義、文字社会の記録作業における口承と書承のインターフェースの形態、社会を組織するにあたっての文字使用の長期的な効果などがそれらの書物で取りあげられている。われわれの問題関心も、これらと重なるところが多いが、文字手段の利用と社会および国家の組織化が、とくにわれわれの関心を引く。

3.1. ローマ帝国周縁民族の文字文化

ローマ帝国の版図の内側では、帝国に屈し、服属した地域の民族は、おおむね共通言語としてラテン語 lingua romana とし、それゆえ当初萌芽の気配があったとしても、結局独自の表記体系に発展させる機会を持たずに終わった。だが帝国の周縁では事情が異なる。アイルランドや北欧ではオガム文字やルーン文字と呼ばれる独特の表記手段を生み出し、ある程度までコミュニケーションと記憶の媒体として利用した。いずれも今日まで使われる表記体系として成熟することはなかったものの、一定期間社会において意志表明・伝達の手段として機能し、歴史的役割を果たしたのである。

3.1.1. ルーン文字 Rune

ルーン文字のアルファベットは、西暦１世紀か２世紀にゲルマン語の音韻体系を表記するために、ギリシア語とラテン語の文字から借用して考案した文字である。全体で 24 の文字からなっている。これはアルファベットの最初の６文字をとって、しばしばフサルク（fuþark）と称される。

この文字は石や金属や木片に刻み込むことを念頭においてデザインされたのは明らかである。最初期のルーン文字は、様々な素材に刻まれてゲルマン語地

---

[61] The Domestication of the Savage Mind, Cambridge, 1977; The Logic of Writing and the Organization of Society, Cambridge, 1986; The Interface between the Written and the Oral, Cambridge, 1987.このプロジェクトのシリーズとは別であるが、問題関心の上で連続している The East in the West, Cambridge, 1996 もこれに加えてしかるべきであろう。

帯の全域で確認される。貴重な装飾品に刻まれた所有者と思しき女性の名前や、戦陣での幸運を祈る言葉や、神の名前を刻んだ刀剣や槍の穂先など、実用目的、祈願文など文言もまた多様であった。その解読は容易ではないが、これら初期ルーン碑文は、ローマ世界の周縁部における文化的共生の表象としての文字という、重要な研究課題の一例である。

最近の研究（Tineke Looijenga, *Texts and Contexts of the Oldest Runic Inscriptions*, Brill, Leiden/Boston, 2003）によれば、24 文字型の古いルーン文字を刻んだ遺物は世界中で 450 点を数える。年代はこのタイプのルーン文字が最初に登場した西暦 150 年頃から、西暦 700 年頃までである。西暦 700 年頃を過ぎると、16 文字構成の新しいフサルクにとって代わられ、24 文字フサルクは消滅してしまう。その原因などについては、諸説あって議論が続いているが、中世北欧文化史の専門家レジス・ボワイエによれば、この消滅期はヴァイキングの商業活動が活発化した頃と重なっているところから、速記化の利便を考えてのことではないかというが、確たるところではない[62]。

この他に変則的なフサルクとして、アングロ・フリーセン型のそれが 26 文字、アングロ・サクソン型が 33 文字から成るものがある。24 フサルク型のルーン文字刻銘遺物の分布は、デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、ドイツ、イギリス、オランダ、フランス、ベルギー、スイス、ハンガリー、ボスニア、ルーマニアに及んでいる[63]。

3.1.2.「ルーン」の意味と起源

それではルーン文字の「ルーン」とは何を意味したのであろうか。その手がかりは前に触れた 4 世紀に黒海沿岸でゴート族が暮らした時代に、聖書をギリシア語からゴート語に翻訳したウルフィラのゴート語訳聖書である。ゴート語は東ゲルマン系の言語であり、ゲルマン語である「ルーン」と親縁関係にあり、この言葉の意味を解明する手がかりを与えてくれるかも知れない。これは碑文として残されているルーン文字を除けば、最古の文字である。

ゴート語聖書を通じて、4 回ほど runa, garuni などの類縁語が出てくる。ウルフィラはギリシア語の mysterion を runa と訳しているところから、ある学者は「秘密の文字」、「魔法の文字」と意味ではないかと考えた。

---

[62] レジス・ボワイエ著, 持田智子訳『ヴァイキングの暮らしと文化』白水社, 2001 年, 256 頁.

[63] Tineke Looijenga, *Texts and Contexts of the Oldest Runic Inscriptions*, Brill, Leiden/Boston, 2003, p.1.

しかし別の専門家はルーンの元は runa ではなく、ryn や ren ではないかと主張した。両方ともほぼ同じ意味である。すなわち ren は水路のような、水を導く地中に穿たれた溝を意味し、ryn は鋤で耕地に穿たれた畝を意味した。こうしたところから、多くの専門家はルーンは秘密とか、魔術ではなく、「切る」とか「刻む」と関係のある ryn, ren に由来し、「刻銘文字」ほどの意味ではないか推定されるのである。

さてそれではルーン文字は、いかなる理由で、また誰によってゲルマン社会に導入されたかであるが、最初期のルーン文字を刻んだ遺物は、ローマ帝国との明白な関連のもとで見つかっている。すなわちこうした遺物の所有者はゲルマン社会のエリート層であった。こうしたことから、以下のような想定が容易に成り立つ。すなわちそれまで文字を用いないオーラルな文化に浸っていた社会に、傭兵としてローマ帝国に雇用されたゲルマン人がこの表記法を持ち込んだのであると。

3.1.3.ボルクハーレンの墓

1999 年 9 月、オランダのマーストリヒトに近いリンブルグ州で、ルーン文字を刻んだ青銅製のベルト・バックルをともなった一基の墓が見つかった。この墓は、メロヴィング朝時代の共同墓地の墓の一つで、共同墓地全体が以前のローマ・ヴィラの暖房用施設の周辺に作られていた。この場所はマーストリヒトの北で、マース川の東岸、ボルクハーレン Borgharen とイッテレン Itteren の中間に位置している。この墓地全体が行列式墓地で、全ての墓が北東／南西方向に配置され、頭部は南西方向を向くように設えられていた。ルーン文字は「ボボ」と読める。この人物は一族が眠る場所に、西暦 600 年ころに埋葬された。副葬品は鉄製の長剣（spatha)、鉄製の短剣（scramasax)、鉄製の槍、鉄製の戦斧、鉄製の楯（umbo)、二本の鉄製鏃、緑色のガラス製大瓶、緑色のガラス皿、青色のガラス製瓶、青銅製ベルト・バックル、錫箔をコーティングしたベルト留金、青銅製の箍をはめた木製のバケツ、金箔を張った青銅貨などである。木製バケツと青銅貨は、フランク人の死者への副葬品に典型的な品物である。

ボルクハーレンで発見されたルーン銘文は、いわゆる大陸のルーン文字に属していた。もっと正確に云えば、メロヴィング・フランクの系統である。この発見は、マース川、ライン川下流の地域に棲むフランク人の間で、ルーン文字がよく知られていた事実を示している。

貨幣は 550 年と 585 年に年代決定されていて、これは被葬者の上限年代決定の手がかりである。トゥール司教グレゴリウスによれば、トンヘレン周辺の地帯は 491 年までクローヴィスの支配が及んでいた。マースリヒトやマース川デルタ地帯はこれに含まれる。6 世紀以降、フランク王権はナイメーヘン Nijmegen から東、ライン川を越えて展開していた。交易活動がライン川やマース川のデルタでは活発に行われた。

西暦 600 年頃から、メロヴィング朝の造幣人の活動が、マース川地方で顕著になる。ヴェルダン、ユイ、ナミュール、ディナン、リエージュ、マーストリヒトで、造幣を行った中に、ボボ、あるいはボゾと称する人物がいた。ボボという名前の造幣人は、ザールブルクの貨幣からも知られている。

マーストリヒト近辺という場所、副葬品の豊かさ、ボボという名前などから、被葬者はフランク戦士層に属すると推定してあやまりではなかろう。多分彼はルーン文字を理解した。興味深いのは、フランク王権が西暦 500 年以降にアレマンニア地方に権力を伸張したが、この日付は南ドイツ、あるいは南西ドイツに最初のルーン文字が出現した時期と重なるのである[64]。

3.1.4　メロヴィング期フランク人とルーン文字

メロヴィング期フランク人は、フランキアを中心として周辺のアレマニエン、バイエルン、テューリンゲン、イングランド、フリーセンなどに支配権を行使した。これらのいずれの地域でもルーン文字が使われた。しかしメロヴィング王権は、ガリアへの覇権を確立した後は在地でのルーン文字使用を展開することはなかった。むしろこの表象システムは「外来」の要素とみなされた。権力を行使した人間はルーン文字ではなく、ラテン・アルファベットを用いたのである。

これまでルーン文字研究者には、メロヴィング・フランク王国にルーン文字使用の伝統があったことを真剣に主張した者はいなかった。だが、Bergakker, Borgharen, Charnay, Arlon, Chéhéry そして多分 Kent などのフランク王国及びその周辺で、ルーン文字遺物が発見されているのである。ルーン文字は 6 世紀のフランキアで知られていた。ここでポワティエ司教となった 6 世紀末の即興詩人ウェナンティウス・フォルトゥナトゥスの、しばしば引用される文章の一節が想起される。”Barbara fraxineis pingatur rhuna tabellis, quodque

---

[64] Ibid. pp. 74-76.

papyrus agit virgula plana valet”「粗野なルーン文字はトネリコの書板に記されてもよいが、パピルス紙でなされることは、また滑らかな木片でもなされよう」。これまた有名な事実であるが、フランク国王キルペリクはラテン・アルファベットに、新しく４つの文字を加えるように指令を発したが、そのうちの一つは uui で、これはルーン文字の w の形を基にした文字であった。だからこの国王はルーン文字を知っていたのである。

証拠となる事実はそれほど纏まっているわけではないが、どこから、どんな風にしてルーン文字が普及したか、おおよその当たりがついてきた。つまり北海沿岸と、ここに流れ込む河川の流域である。ルーイエンガは北ドイツとデンマークを一応の候補地としている[65]。

3.1.5. ルーン文字の言語

ロシアの言語学者マカーエフ E.A. Makaev は、最初期のルーン文字が、いかなるゲルマン語の方言に属するかを確定しようと試みた。彼は以下のように述べている。「紀元前数世紀から紀元後数世紀にわたって、スカンジナヴィア語はまだ独立の言語グループを構成していなかった。東ゲルマン語は、スカンジナヴィア語から派生したのではなかった。それというのも、スカンジナヴィア語がまだ存在していなかったからである。それは共通ゲルマン語の最終局面から派生したのである。ゴート語の共通ゲルマン語からの分離と、独立したゴート語の発展の後に、ゲルマン語の言語共同体は、二つのグループによって代表された。東ゲルマン語と西ゲルマン・スカンジナヴィア語である。古いルーン文字の言語が発達したのは、西ゲルマン・スカンジナヴィア語を基礎としてであった」。マカーエフは、言語問題はルーン文字の起源の解明を基礎にして、取り扱われるべきであると主張する。「ルーン文字は、現在でも未知の北イタリアのアルファベットを基にして、紀元後数世紀に南ゲルマン部族の一つが作り出したと」と考えた。南ゲルマン諸部族が話した言語とは何か。彼は南ゲルマン方言の存在を想定していない。また最古のルーン文字の言語的特徴は、ゲルマン語共同体の西の部分の言語状態を反映していると考えている。それは多分その通りであろう。ルーン文字の伝播は、ライン川を下り、北西ドイツを抜けてデンマークへ至る西ルートを辿っているからである。だがこれではマカーエフが自分で提起した、南ゲルマン部族が話した方言についての回答にはなっていない。

---

[65] Ibid. p. 77.

その代わり、彼は単一の文字共同体という概念を導入する。結局彼の論理を再構成した場合、唯一可能な答えは、最古のルーン文字は西ゲルマン語方言を反映しているということである。

総括しよう。最初にルーン文字を展開したのはライン川に沿ったローマ化された地域であった。多分それは Ubii の地方である。考案されたのは紀元後 1 世紀頃であり、ラテン・アルファベットの北イタリア・バージョンと考えられる。最初の使用者はローマ帝国の傭兵になったゲルマン人、とくに読み、書く訓練を受けていた士官クラスであった。こうした文字を書く能力をもった士官や兵士は、小集団であったと推測される。そのことはルーン遺物が限られ、ここかしこに分散してしか見つからないところから判断される。

3.1.6　貨幣のルーン文字

すでに言及したように、ルーン文字の初期の歴史は二つに分けられる。第 1 期はこの文字が考案されたアルカイック時代から 7 世紀頃までである。それはゲルマン人が住んでいたヨーロッパの各地でその使用が知られている。時期的にはキリスト教伝播以前から、ヨーロッパがキリスト教化する時代までということになる。これは大凡、メロヴィング朝時代に対応する。厳密に云うとルーン・フサルク最初の登場の時期は、地域によって異なる。ノルウェー、スウェーデン、デンマークなどでは西暦 2 世紀に遡る。イングランドは 5 世紀である。大陸での使用は 2 世紀から 7 世紀までで、これ以後は途絶えてしまう。オランダでは 5 世紀に開始し、9 世紀まで続く。

第 2 期には、ルーン文字が一層広く使用された印象を受ける。この時代はスカンジナヴィアとイングランドで、おおむね 7 世紀の間に始まった。オランダでは、ルーン文字の史料は様々見つかっているが、多くはフロニンヘン Groningen やフリースラントのテルペンと称される台地であった。商業活動の拠点とするために盛土で固めた土地で、18 世紀後半から 19 世紀前半に発見されている。ルーン文字を刻んだ貨幣は比較的多く、この現象はイングランドと共通している。おそらくルーン文字の銘文を持った貨幣は、北海特有のものと考えてよいであろう。

オランダの台地から出土したルーン銘文貨幣は、複数のルーン表記体系を示している。つまりこの地方特有の事情と、外部からの影響の両方の要素が絡み合ったことを窺わせる。

オランダのルーン史料は結論的に云うと、古いタイプのフサルクで書かれたアルカイックな遺物、アングロ・フリーセン型ルーン、新しいスカンジナヴィア型フサルクを使用したルーンと全てのパターンを網羅している。繰り返すが大陸の史料には、古いフサルクを用いたルーンしかない。

ここで、ルーン銘文を刻んだ７世紀のシャット貨について、少し詳しく見ておこう。

フリーセンで造幣されたシャット貨は、ルーン銘文貨幣がいかに広範に使用されたかを教えてくれる。

3.1.7　４枚のフリースラント出土ルーン金貨が表示するもの

シャット貨とはラテン語の銘文を刻んでいない銀貨で、重量は１グラム以下の小額貨幣である。後期ローマ帝国の基軸通貨は、309 年にコンスタンティヌス帝が定めた重量４.5 グラムのソリドゥス金貨であり、ポスト・ローマ期西ヨーロッパで広く流通したのは、「三分の一」を意味する「トレミッシス」の名前を冠した三分の一ソリドゥス金貨であった。シャット銀貨は、さらにトレミッシス金貨以上に価値の低い小額貨幣であった。

この銀貨の登場を歴史的にどのように位置づけるかについて、かつては金本位から銀本位への転換は、西ヨーロッパ経済の衰退の証—金の枯渇現象—と解釈されたが、現在ではむしろ貨幣経済の進展の証拠とみなされるようになった。小額貨幣の展開という事実は、貨幣の日常的使用と切り離しては考えられない事態であり、それだけ安価な日常消費物資の貨幣による購入という行動様式が社会に浸透したことを示す証拠であるというのである。「シャット貨」という名前は、17 世紀に付けられた名称であり、むしろソリドゥス金貨の下位の単位となるデナリウス銀貨の初期形態の意味で、プロト・デナリウス貨幣とか、プロト・ペニー貨幣と呼ぶべきであるという論者もある[66]。確かに純粋に貨幣史の枠内で考えると、この名前のほうが系譜関係を明瞭にする利点があるが、他方それではシャット貨幣の歴史的・文化的コンテクストの側面が希薄になってしまう。われわれの問題関心からして、シャット貨の呼名のほうが適していると思われるので、こちらを使用する。

最初の小額銀貨が登場したのは、フランク国家のネウストリア分王国であっ

---

[66] Pierre Riché, Dictionnnaire des Francs. Les temps mérovingiens, Édition Bartillat, 1996, p.303.

た。時期は670年代前半とされる[67]。数多くのフリーセン地方のシャット貨が、ルーン文字を刻印した貨幣の普及を物語っている。オランダの考古学者H.A.ハイディンガによると、フリースラントの権力の中心は、おそらくWestergoとOostergoに在った。そこでは6世紀後半と7世紀前半に、大量の金貨が流通していた。ルーン文字を刻んだ4枚のソリドゥス金貨が見つかっているが、それらの造幣年代は、明らかに6世紀後半から7世紀前半の、金貨流通時代の産物と思われる。これらは北海交易に向けられ、イングランドの造幣に影響を与えたと、ハイディンガは見ている。

イギリスの古銭学者ジョン・ハインズは、フリースラントのルーン文字を刻んだ貨幣は、トレミッシス貨が支配していた統合されたメロヴィング領域のフランキアやもっと南の地方とは異なる、別の商業ネットワーク、つまりクロス・北海商業ネットワークで使用されるための貨幣であったのではないかという仮説を提示した[68]。中世初期の北西ヨーロッパのゲルマン世界で影響関係、同盟関係、文化の面で互いに競合する、複数の領域があったという想定は、ハインズによれば着実に多数意見になりつつあるという。そして付け加えて、次のように云っている。フリースラントのルーン銘文貨幣は、イングランドのルーン貨幣より先にあり、イングランドでも流通していたと。

ルーン文字使用の普及に関して、メロヴィング朝ネウストリアの重要性を主張するルーイエンガは、フリーセンのルーン貨幣と、イングランドのルーン貨幣双方へのメロヴィング国家の影響を云々できるかも知れないと考える。先に述べた4枚のルーン碑文を刻んだソリドゥス金貨は、メダルではない。記念メダルと貨幣とは今日ではまったくの別物であるが、歴史的に見るとその機能の点で簡単には違うと云いきれない面があり、古銭学者の間でもしばしば議論が交わされるところである。しかし、4枚の金貨は打造であり、鋳造ではない。メダルは通常鋳造だからである。これらは貨幣として使用されたのである。

ハインズはフリースラントとイングランドの金貨は、それがルーン碑文のそれであろうと、非ルーン貨幣であろうと、その出現は歴史のある段階に対応していると考える。すなわち安定し、貴族制的な社会ハイアラキーを伴った王制という政治組織の登場と対になっている。貨幣は強力で堅固な社会エリートが

---

[67] Mark Blackburn, Money and coinage, in *New Cambridge Medieval History,* vol.II, p.545.

[68] John Hines, Coins and Runes in England and Frisia in the Seventh Century, *Amsterdamer Beiträge zur älteren Geschichte,* Bd. 45, pp.47-62.

求めた交換要求を表現する財貨である、ということである。

これらのルーン銘文金貨の登場に関して、ルーイエンガは可能な二つの理由を想定しているが、これはおそらく妥当な仮説であろう。一つは北西ゲルマン社会のエリート層、それがフリーセン人であろうと、アングロ・サクソン人であろうと、いずれにせよこれらのエリートが求めた貴重財の交換ネットワークの必要性。もう一つが、当時強力で支配的であったメロヴィング・フランク人からの社会的、文化的離脱の欲求である。

貨幣に刻まれた銘文は、このように一つの社会・文化表象として、所与のコミュニケーション構造（これはさしあたり交換行為のうちに表現される）を剔出するための素材でもある。

3.2. 古高ドイツ語の展開

コミュニケーション手段としての言語の機能だけでなく、言語が一つの文化表象であるような視点からその歴史的意義を考えるならば、ゲルマン人の言語が文字化されるプロセスは、まさしく文化変容の好個の事例であろう。ここでわれわれは一つの仮説を立てることができる。すなわち、イングランドと北海沿岸のゲルマン人は、７世紀末頃から彼らの表記手段としてルーン文字の使用を放棄して、ローマン・アルファベットを用いる方向に大きく舵を取ったというのがそれである。８世紀以後もルーン文字を使い続けたスカンジナヴィアのゲルマン人が、フサルクを 24 字から 16 字に減少させたという事実や、７世紀以後イングランドやフリースラント、ライン川地帯にルーン文字が見られなくなるという事実は、こうした変化の反映ではなかったかという想定を可能にしている。もしそうであるならば、文字使用という文化的行動の根源におけるスカンジナヴィアを除いたゲルマン人の選択は、極めて重要な歴史的意味を帯びていたと云うことができよう。この選択の持つ意味を理解するために、この事態を取り巻く歴史的コンテクスト、なかんずく７、８世紀の北海沿岸の歴史的状況を見ておこう。

3.2.1. ８世紀の海峡横断的関係[69]

3.2.1.1. 先駆者ウィリブロード

[69] この部分はRosamond McKitterick, “ England and the continent”, The New Cambridge Medieval History, vol. II, pp.64 ff.

８世紀はフランキアにとってもイングランドにとっても、急激な政治的変動の時代であった。イングランドではマーシア王国が誕生し、カロリング家が台頭した。後者の所領と利害関係はライン、モーゼル、マース沿岸に集中していた。イングランドからの大陸伝道の初期の活動が集中したのは、まさしくこの地域であった。

イングランドから発した最初の布教者はウィリブロードであったが、この人物についての情報は数少ない。667 年から８年にかけてノーサンブリア王国に生まれ、幼少時に修道院に入れられた。678 年頃にアイルランドに渡り、ノーサンブリア出身のエグベルトが指導するラース・メルシギ Rath Maelsigi にあるイングランド人コミュニティにみを寄せとたされる。ドイツの布教を考えたのは、エグベルトであった。ウィリブロードは 690 年にアイルランドを出発した。１２年間におよぶアイルランド滞在にも拘わらず、彼のノーサンブリアとの結びつきは維持されたようである。もっとも彼が大陸で行った布教活動の初期の段階でフリースラントの伝道や、エヒテルナッハ修道院の創建に際しては、アイルランドの仲間が大きな役割を果たしたのだが。仲間のウィルフリードとアッカはウィリブロードのローマ巡礼に随行したようである。彼には先にも指摘したように、多くのイングランド出身の助手や随行者がいた。そうした例として、南ウエストファリアを布教し、カイザースヴェルト修道院を建設したスイトベルト、南オランダのエグモントに赴いたアダルベルト、ゲルダーラントで活動したウェレンフリードなどがいた。ウェレンフリードはフリースラントで最初の司祭となるリウドガールの大叔父である。

かつてダゴベルト一世がケルン司教座にユトレヒトの要塞と教会を賦与したのは、ケルン司教座がフリースラントの宣教の責任を追うという条件であった。このことはフランク人が、異教徒のフリーセン人を教化する必要を感じていたことを示している。彼らの目的はフリーセン人を自分たちと同じ宗教に改宗させることにより、敵対意識を薄めることにあったと思われる。

こうした目的をもって、フランクの側からは聖アマンドゥスが、スヘルデ川の東岸地域で短期間布教活動を行っていた。彼はマーストリヒト司教の職にあって、さらに北に教線を引き上げようとしていた。彼はアントウェルペンに拠点を作り、ここに聖パウロと聖ペテロに献納された教会を建てた。ノワイヨン司教エリギウスはフランドル、アントウェルペン、そしてフリーセン人の間に宣教した。サン・ヴァンドリーユ修道院のヴルフラムスは 690 年頃にフリース

ラント伝道に出かけたが、これはピピン二世のフリースラント進出計画と結びついていた。

こうした歴史的経緯を踏まえるならば、ウィリブロードを支援し、後押ししたカロリング宮宰一門とって、すでにフランク側の規定の方針となっているフリースラント制圧に、彼の到来と宗教的熱意は絶好の機会となったのである。７世紀末にまだ権力基盤が脆弱であったカロリング宮宰家にとって、ウィリブロードのような異国人が、フランクの支配者の意向に従いながら伝道活動を行うのは、フランク人司教がそれを行うよりも好都合であった。それと言うのも、ピピンにとってこれはケルン司教座から自由な教会を、自分の勢力圏の中に作ることを可能にしたからであった。フリースラントの宣教はカロリング家の物的支援と協力が不可欠であったからである。翻って、宣教団やそのフランク人、フリーセン人協力者の支援を得てこの地のキリスト教化が達成されたならば、その地にフランクの政治的影響力を確実に浸透させることができる。ベーダはそうした目論見を、ピピン二世がウィリブロードを自分の翼の下に庇護し、彼を教皇によって聖別してもらうべく、ローマのセルギウス一世のもとに送ったと記している。ピピン二世はフリースラント南部からフリーセン人の王ラードボドを駆逐したところで、この地にウィリブロードを送り込み、彼と彼の仲間に王権の支援と恩恵を与えたとされる。ベーダが「恩恵」beneficium という言葉で表現した実際の内容は、まず間違いなくこの地域に所領を賦与したということである。こうしてフリースラントのキリスト教化と政治的征服は、互いに手を携えて進行したのである。

こうしてウィリブロードはユトレヒトに司教座を立ち上げ、この地の castellum の中に教会を建設した。さらにベーダの証言によれば、ピピンは彼自身の王国（アウストラシア）の中の幾つかの地域をウィリブロードに委ねた。ウィリブロードはここで異教信仰を根絶やしに、キリストの教えを説くようにしたというが、その記述はおそらくエヒテルナッハ修道院の建設を指している。この修道院はピピンではなく―後でピピンがこの修道院に土地を寄進したことは確かだが―、ピピンの義母エーレン Oeren のイルミナが建設した修道院であった。現在ではこの修道院の大掛かりな発掘に基づく考古学的研究が進んでいて、それがローマ時代のヴィラの敷地を転用したことが明らかにされている。

エヒテルナッハ修道院は、715 年から 719 年にかけての、ピピンの死後訪れた危機の時代とカール・マルテルがその権力基盤を築くまでの間、ウィリブロ

ードに恰好の避難地となり、また彼の後半生にとって活動の主要拠点となったのである。エヒテルナッハ修道院に伝来している初期の文書は、ウィリブロードが地方のフランク、フリーセン双方の有力者から得た支援と物質的基盤の広がりを教えてくれる。寄進された土地はスヘルデ川の河口地帯から、北ブラバント、トクサンドリア、ライン川下流域、エヒテルナッハ（現在はルクセンブルク公国）トリーヤからテューリンゲン、フランケンまで展開している。さらに 704 年と 714 年になされた寄進は、13 年間にわたって独立勢力であったテューリンゲン大公によってなされたのであった。そしてこれらの所領が後にボニファキウスがテューリンゲン伝道を展開した折に、重要な拠点の役割を果たしたのであった。

ウィリブロードがイルミナと繋がりをもったことは極めて重要であった。イルミナは先に指摘したように、ピピン一門に属し、当時の北西ガリアの有力修道院であった、ニヴェル Nivelles、アンデンヌ Andenne、プリュム Prüm、ヴァイセンブルグ Weissenburg など緊密に連携していたからである。イルミナはヴァイセンブルグに埋葬された。エヒテルナッハ修道院の建設された場所はイルミナの所領で、彼女はここにすでに聖三位一体や聖母マリア、聖使徒パウロとペテロの献げられた幾つかの教会と、遍歴説教者用の小さな修道院を建てていた。それから数年経った 706 年に、ピピン二世と妻のプレクトルードの寄進を受けて、より堅固な基盤を築いた。この寄進の前に、ウィリブロードは既にこの地に教会と修道院を建てていたことが、この寄進文書から窺われる。その教会は奥行きが２１メートルで、幅が 7.1 メートルの長方形をしていた。その遺構は、1944 年の爆撃の折に発見されたのであった。この教会は同時に洗礼堂も兼ねていたと考えられている。洗礼堂の存在が、ウィリブロードのこの土地の宣教者としての本質的な役割を示している。

かくしてエヒテルナッハ修道院はこの地方のキリスト教の受容の徴であるとともに、アウストラシアで達成した宗教的成果の証でもあった。イルミナの死後は、その娘プレクトルードが母親の意向を継承し、夫のピピン二世がこれに協力した。ピピンは既にフリーセン人を手名付ける手段として、ウィリブロードを利用していた。エヒテルナッハ修道院は、カロリング家の影響を周囲に及ぼすための拠点となり、この役割はカール・マルテルがアウストラシアでの地位を確立し、ネウストリアとの関係を作り上げた後で、彼によっても引き続き維持された。751 年にカール・マルテルの息子ピピン三世がフランク王国の王

位に即くと、エヒテルナッハは王家直属の修道院となった。

3.2.1.2. ボニファティウスのゲルマン伝道

ボニファティウスについては、その死後にすぐに伝記が書かれただけでなく、彼が書き送った 150 点の書簡が保存されたこともあり、その布教活動や人となりについて、ウィリブロードよりも詳しく知られている。ちなみにアルクインについては 300 点の書簡が、教皇グレゴリウス一世については 850 点が知られている。彼は 675 年頃ウェセックスの多分エクセター近くで、裕福な家庭に生まれた。両親が彼に付けた名前はウィンフリスWinfrithであった[70]。ボニファティウスという名前は、彼が最初にローマを訪れた時、教皇グレゴリウス二世が与えた名前であった。初歩的な教育をエクセターで受けた後、彼はサザンプトンに近いナースリングNursling修道院に入った。彼は学識豊かな若い修道士に成長した。712 年にはウェセックス教会では、将来を嘱望される若者という評価を与えられていた。彼はヴィリブロードの報告に刺戟されて、布教活動に邁進することに傾いていった。こうして、彼は 716 年にフリースラント目ざして出発した。だが、時折悪しく、宣教活動が危険に瀕して、ヴィリブロードがイングランドに引き返し、ボニファティウスも翌年帰還した。

718 年に今度は直接ローマに向けて出発する。その理由は定かではないが、結果は明瞭で、彼は既に指摘したように教皇からボニファティウスというローマ風の名前を貰い、布教地域—想定されていたのはテューリンゲンであった—を特定しない伝道活動の特別許可を与えられた。彼は教皇の特使の資格を与えられ、ドイツ領域のキリスト教化の現状を報告するように求められたと推測される。この種の調査の期は熟しつつあった。というのもカール・マルテルがザクセン人に対して反撃に転じ、中部ドイツに侵攻しつつあった。

ウォレス＝ヘイドリルによれば、教皇権側の関心は、約一世代に及ぶヴィリブロードらの布教活動がライン地方さらに、それを越えてどのような達成を示しているかを知りたいという欲求、この地域についてのカロリング宮宰家の政治的意図はどのようであり、またフランク教会が置かれた状況はどのようであるかなどの諸点が関心の中心であった。こうした点について教皇庁は知る手段がなく、これをボニファティウスに託したのだという[71]。

---

[70] Mckitterick, op. cit. p.72.

[71] J. M. Wallace-Hadrill, *The Frankish Church*, < Oxford History of the Christian Church>, Oxford, 1983,

ウォレス＝ヘイドリルはこの時、教皇庁自体が決断を迫られていた。世界布教が緊急に果たされなければならない課題であるという感覚である。「日は暮れつつある」advesperascit dies というのが、これより少し後の時代ではあるが、教皇グレゴリウス三世（731-741）の言葉であった。こうして以前にも増して教皇特使としての意識に駆られたボニファティウスは北のテューリンゲン、フリースラントに向かった。フリースラントでは、ヴィリブロードが再び布教を前進させようとしていた。719 年から 722 年にかけて、ヴィリブロードとボニファティウスは協力して、再びフリーセン教会をフランクの保護下に置こうとした。年長のヴィリブロードはボニファティウスを、フリースラント伝道の面での自分の後継者と考えたが、年若いほうはそこに留まる積もりはなく、また教皇から与えられた使命も、それを認めていなかった。

ボニファティウスは南のヘッセンに下った。この土地ではキリスト教が異教信仰と分ちがたく混淆状態にあった。以前からのフランクの要塞があり、後にボニファティウスが修道院を建設することになるアメーネブルク Amöneburg で、彼は双子の首長に出会った。伝記によれば、この二人は「キリスト教の名前のもとに」偶像を拝跪していた。当時これがこの地方のキリスト教信仰の表面的な受容の典型的な姿であった。確かにかつてマインツ司教の庇護のもとに、フランク人とアイルランド人宣教者の姿があったのだが、彼らがこの地を去ってから、事態はむしろより悪化した。マインツ司教はボニファティウスの干渉を快く思っていない。ヘッセン人のもとでの彼の成功は、教皇への進行状況報告の機会をもたらし、ボニファティウスをローマに召還しての検証作業が行われた。そこでの会議から、彼はとくに管区を持たないままで、ライン川の東全体の伝道の使命を帯びた教皇公認の布教者という姿を現わすのである。この任務を遂行する旨を、ボニファティウス自身が書き記した宣誓書が今でも教皇庁に残されている。とくに「全ゲルマニア地域」という表現が強い印象を与える。教皇は自らの代理人たるボニファティウスを厄介な立場に置いた。なぜなら教皇は少なくとも理論的にはライン地方の司教たちにその布教を委ねていた地域を、一人の人物にその全体を管轄する権威を与えたからであった。いずれ衝突は避けられず、衝突すればフランク王国の実権を握るカール・マルテルの有効な支持がなければ、ボニファティウスの敗北は目に見えていた。この段階で教皇はカールにボニファティウスの保護を頼み、カールはその承諾を正式の書簡

---

p.151.

で伝えた。

これにヘッセンとテューリンゲンでの 10 年にわたる活動が続いた。その手始めはガイスマール Geismar での、この地のキリスト教徒からの助言で行った、ゲルマン人の伝統的な神オーディンに捧げられた樫の巨木を伐採するという華々しいパフォーマンスであった。これは意図した通りの効果を発揮して、この地方での異教放棄の重要な画期となった。そしてこのパフォーマンスはボニファティウスの伝道活動の特徴となった。彼は切り倒した樫の巨木をフリッツラーFritzler の最初の教会を建設するための棟木に利用した。伝道教会は初め修道士によって、後には修道女によって聖務が執り行われたが、まさしくこれは彼の活動の成果であった。こうした教会の幾つかは、ザクセン人の攻撃により破壊された。752 年には 1 年で 30 以上の教会が攻撃され、破壊された。しかしそれ以外はゲルマーニアの地での教会生活で重要な役割を果たすことになる。ウィンチェスター司教ダニエルはボニファティウスに書き送ったある書簡の中で、いかにして異教徒を改宗に導くかを助言している。そこには異教徒の知性を見くびってはならないこと、穏やかに教え諭すべきことが述べられている。彼がこの助言をどのように生かすことができたか、詳しくは分からない。だがその布教の成果がローマ教皇庁に目覚ましいものと映っていたことは、732 年頃に教皇グレゴリウス 3 世が、大司教が纏う典礼用のパッリウム pallium と称されるマントを送っているところから明らかである。かくして彼はライン川の東のドイツ教会を統べる大司教となった。しかし相変わらず司教座もたなかった。ボニファティウスは教会の組織化よりも、異教徒を改宗し、彼らを霊的に救済することにより大きな喜びを感じた。彼はフランク人貴族とのつきあいを心底嫌っていた。

738 年、ボニファティウスは 3 度目の、そして最後のローマ訪問を行った。彼の望みはテューリンゲンの前線の奥深くから、再びザクセン地方の伝道に帰ることであった。アングロ・サクソン人の彼にとって、ザクセンこそが父祖の血統からも最も心を寄せる伝道活動のゴールであった。だが教皇の命令はテューリンゲンへの帰還であり、加えてバイエルン地方をも伝道することであった。ボニファティウスはこれまであまり南ドイツを布教した経験がなく、アレマンネンはカール・マルテルの指示を受けたピルミヌスの活動領域であった。あまつさえバイエルンの教会上の繋がりは、フランク勢力よりは、イタリアやローマとの繋がりが強かった。歴代のバイエルン大公はマインツ司教のコントロー

ルを嫌って、東バイエルンに修道院を建て、伝道活動への協力も遥か東のスラブ世界を中心にしていた。

ボニファティウスは 739 年にバイエルン大公オディロの宮廷に、教皇の特使の資格で訪問し、歓迎された。彼は既存の政治的枠組を下敷きにして、司教管区をあらためて分割した。その結果パッサウ、レーゲンスブルク、ザルツブルク、フライジングなどに司教が置かれることが決められた。パッサウ司教ヴィヴィロはアイルランドの遍歴司教の伝統を受け継ぎ、既に教皇グレゴリウス三世により叙任を受けていた。だからキリスト教布教活動の第 1 段階は、ボニファティウス到来前に開始されていた。だが、ボニファティウスが見たのは「異教」的な因習に染まった司教や司祭たちであった。バイエルンの四司教座で、ただ一つ彼の影響下に留まったのはフライジング司教座であった。司教管区の分割を別にして、ボニファティウスがバイエルン地方に残した永続的な刻印は、ベネディクト戒律の修道制を展開させたことである。だが一度その活動が一段落し終えると、バイエルンでの彼の個人的影響力は急速に縮んだ。ピピン三世が南ドイツを勢力下に収めた時、ピピンが好意を示したのはアイルランド人でザルツブルク司教のヴィルギリウスであった。

741 年にボニファティウスはヘッセンとテューリンゲンに戻った。この年カール・マルテルと教皇グレゴリウス三世が死没した。ボニファティウスはカールの後継者となった二人の息子を新たな庇護者とした。すなわちアウストラシア宮宰となったカールマンとネウストリア宮宰のピピン三世である。新教皇ザカリアスは、先任のグレゴリウス二世と三世に比較して、ゲルマーニアの伝道に関して距離を置いた態度を取った。ボニファティウスが依然としてザクセン伝道に情熱を燃やしていたことは、彼が 738 年に書いた手紙から知られる。ザクセン人へのフランクの支配は間歇的にしか作用しなかった。

暫く後に、ボニファティウスはザカリアスに新しい 3 人の司教を任命したことを伝えた。その 3 人とはヴュルツブルク Würzburg のブルグハルト Burghard、ビュラブルク Büraburg のウィッタ Witta、エルフルト Erfurt のウィリバルド Willibald であった。これら 3 名はいずれもアングロ・サクソン人であった。これらの司教管区は南と西は既存の司教区を境とし、北と東は異教徒の棲む世界と境界を接し、内部は部族集団の分立が区切る境界線が縦横に走っていた。ヴュルツブルクは南テューリンゲンの司教座、ビュラブルクはフリッツラーの近くに位置する oppidum で、ヘッセン地方の司教座、エルフルトは単なる locus

と形容された寒村で、北テューリンゲンの一隅にあった。この司教座グループは、745 年に南フランケンのアイヒシュテット Eichstätt が加わって完成した。

これより 1 年前の 744 年、ボニファティウスはヘッセン地方のフルダに修道院を建設した。それは彼の先輩ウィリブロードにとってエヒテルナッハ修道院が有していたのと同じ意味を持った。それは伝道活動の疲れを癒す休息の港であり、未だにその布教に執念を燃やすザクセンの後背地であった。彼はバイエルン時代に弟子であったストゥルミン Sturmin をフルダの院長に据えた。ストゥルミンは聖ベネディクトスの戒律を原点に戻って学ぶために、ローマとモンテ・カッシーノ修道院を訪れた。数年後に教皇はこの修道院に特権状を与えて、教皇直属の修道院とした。これはドイツの修道院の中で管区司教の裁治権から解放されて、教皇の裁判権に属した最初の修道院であった。この修道院はアウストラシア宮宰カールマンが賦与した土地に建てられた。もっともフルダにはすでにローマ時代から間歇的な土地占拠の痕跡が見られ、短期間ではあるがメロヴィング朝期に定住の中心にもなったことがあった。

さてボニファティウスは大司教であったが、相変わらず自分の司教座を持たなかった。大司教管区が固有の領域性を持つことは、アングロ・サクソン教会改革の成果としてもたらされた構造の最重要のポイントであった。だがフランク人はそうした考えを理解しなかった。彼らはボニファティウスの構想に否定的で、ランスとサンスの大司教は、ネウストリアにルアン只一カ所を大司教座として認めただけであった。西フランキアの教会組織は、古い大司教管区の構造をいっかな変えようとはしなかった。アウストラシアに関して、宮宰は最初ケルン大司教座を与えようとし、教皇ザカリアスも承認していた。だが結局実現しなかった。司教権力を政治的手段として利用とした地方豪族の抵抗が大きく、またカロリング家の関心も南ドイツに移って行き、苦労して豪族の反対を説き伏せるだけの苦労を厭うたのである。やがてその代わりにボニファティウスにはマインツ大司教座が与えられた。マインツ大司教座は、ライン川中流域で中部、東部ドイツから多くの河川が流れ込み、その経路を利用してのこれらの地域の宣教活動に適した拠点であった。だが、ボニファティウスには不満であった。彼はもっと北の地に大司教座を創設し、師のウィリブロードが企てた伝道を更に前進させることを願っていたのである。ゲルマーニアの地の教会の整備と改革の潮流はアングロ・サクソン人の手から、フランク人の新しい世代に移りつつあった。サン・ドニ修道院長フルラドやメッス司教クローデガング

がその代表格であった。

ボニファティウスの最後の公的な任務は、751 年ピピン３世をフランク王として塗油したことであった。『フランク王国年代記』はそのように述べている。だがピピンを国王として即位させることの同意を教皇から取り付けるべく派遣されたのはボニファティウスではなく、フルラドとブルグハルドであった。結局成功しなかったが、ボニファティウスがなぜケルン大司教座を獲得しようと望んだかが、彼が非業の最期遂げた事情から推測できる。753 年に、彼はピピンから北フリーセン地方を訪ねる許可を得た。おそらくこの地に教会を組織するためと思われるが、数人の供を連れて出発した。いまや老人となったボニファティウスの心の中には、殉教者としてその生を終えたいとの願望が燻っていたかも知れないが、確かなことはわからない。ズイダー・ゼーZuider Zee を越えた海辺の湿地にあるドックム Dokkum で、彼ら一行は海賊の一団の待ち伏せに遭い、殺害された。彼らは異教徒というより、獲物を狙った盗賊集団であった。754 年６月５日のことである。彼の遺体は初めユトレヒトに運ばれ、ついでライン川を遡ってマインツに、最後にフルダに運ばれて自らが創建した修道院に埋葬された。その生涯のほとんどをドイツ全領域の宣教と、教会、修道院の組織化に献身した偉大な宣教者が天に昇った。それはあたかも古高ドイツ語の最初期の記録が登場する時期と符節を合わせるかのようである。

ボニファティウスが伝道活動の野で生きた人物であることから、この人物が書物の世界から遠ざかっていたかのような印象を受けるかも知れないが、それは正しくない。ボニファティウスがドックムで落命したとき、彼は何冊かの書物を携えていた。それらは現在でも一種の聖遺物としてフルダ修道院のあるランデス・ビブリオテークに Codices Bonifatiani 1,2,3 として保管されている。１þ は福音書である。それはカプア司教ヴィクトールの命令で書写され、546〜547 年にこの司教が説教で用い、その後北のイングランドに齎されたものである。ところどころにアングロ・サクソン書体で註が付けられているが、この筆跡はボニファティウス自身の筆跡とされている。第２の写本は古代教父の反アリウス論を集めた、おそらくブルゴーニュ地方で８世紀初頭に作られた写本である。これは一般にラギントルーディス写本 Code Ragyntrudis と呼ばれるが、この名前は写本が献呈された婦人に由来している。この書物の外形的な特徴は、その縁の部分が鋭い刃物の切っ先で斬り付けられて断ち切られた痕跡を残していることである。ボニファティウスは海賊に襲われたとき、初めその攻撃に対

して書物を使って防いだとされるが、この損傷はその時のものであるとされている。英国の高名な中世史家ウォレス＝ヘイドリルはこの実物を目にした時の衝撃と名状しがたい感情を、その著『フランク教会史』の中で吐露している。

彼の残した書簡には、イングランドの友人に対して、書物を送って欲しい旨の依頼を内容とするものが数多く見られる。異教徒の世界を、命の危険に晒されながら、なお書物の世界への執着を隠さないこの人物が、その宣教のあらゆる道筋で、文字記録への志向をドイツの民の間に涵養したであろうことは想像に難くない。ここでボニファティウスもその一人であったアングロ・サクソン人が、既に１世紀も前に、ドイツ語と系統を同じくするゲルマン語の一派であるアングロ・サクソン語をローマン・アルファベットで表記する習慣を確立していた事実を想起するのは無駄ではないであろう。アングロ・サクソン人の宣教活動は同時に、ゲルマンの地の文化伝道でもあった可能性はもっと掘り下げられてしかるべき研究テーマであろう。

3.2.2.　書き言葉としての古高ドイツ語の生成

この問題を直接に論じるのは、極めて困難である。ゲルマン系のドイツ民族がルーン文字の表記体系から離れて、後の古高ドイツ語、ついで中高ドイツ語、さらに新高ドイツ語と、現代までいたる歴史を刻むドイツ語固有の表記体系に転換したプロセスを具体的に描き出すための史料が決定的に欠けているからである。ちなみに古高ドイツ語は８世紀から 11 世紀頃まで、中高ドイツ語は 11 世紀から 14 世紀まで、新高ドイツ語は 14 世紀から現在まで使用されている。

この転換のプロセスを考えるにあたって、同じゲルマン語系の言語であるアングロ・サクソン語を使用した、イングランドの古英語表記体系が参考になると思われるので、イングランドの事情を見てみよう。

スーザン・ケリィの言によれば[72]、初期アングロ・サクソン時代に実用的なコミュニケーション手段としてルーン文字が使用された可能性が大きい。14 世紀からノルウェーのベルゲンで木片に刻まれたルーン文字の記録が、500 点も見つかっているところからそう言えると考える。記録の中身は手紙や日常的な伝言で、毎日の生活にこうした通信手段がごく普通に用いられたと推測されるのである。残念ながら現在まで、イングランドでこの種の日常通信文に利用され

---

[72] Susan Kelly, “ Anglo-Saxon lay society and the written word”, R. Mckitterick (ed.), *The Use of Literacy in early Medieval Europe,* Cambridge, 1990, p.37.

たルーン文字の痕跡は見つかっていない。だが、社会の教養ある層がルーン文字の知識をもっていて、これに馴染んでいたことについては少なからず証拠がある。例えば、アングロ・サクソン時代のナゾナゾには、ルーン文字の知識が前提とされるものがあった、とされる。８世紀半ばのノーザンブリアの詩人シネウルフCynewulfは自分の作品に、秘密の文字で署名をしたと語っているが、秘密の暗号文字とはルーン文字であった。

８世紀後半に２つのルーン文字がローマン・アルファベットに付加された。それはþ と　Þ　で、それぞれラテン語にない英語の音　θ／ð／ū／を表記するためであった。これは既に述べたが、それより 200 年前にフランク国王キルペリクス１世が、指令を発してラテン・アルファベットに４文字を加えるよう出した指令を想起させる。これまでそのアルファベットがギリシア文字であるとされて来たが、よく考えてみればそれがギリシア文字である根拠は見当たらず、むしろ自らのエトノスであるゲルマン語の音を表現するルーン文字であったとするルーイエンハの推測が正しいと思われる。

イングランドにおけるラテン語以外の、つまりアングロ・サクソン語による文字記録の出現は、話し言葉としてのラテン語の消滅と関連していると見てもよい。世俗社会に生きる人々にとって、ラテン語は今や過去のものとなり、行政や社会規律の全分野において、俗語が標準となった状況への対応である。特に興味深いのはアングロ・サクソンの部族法典は、大陸と異なり当初からアングロ・サクソン語で記録された。ほとんどトゥール司教グレゴリウスと同時代のケント王エセルベルトが制定した「エセルベルト王法典」（597/８年）は、アングロ・サクソン語で書かれた。８世紀の修道士ベーダは、自らの民族にエセルベル王が与えた恩恵の一つとして、ローマ人に倣って王が英語で（Anglorum sermone）法典を与えたことであるとし、それはベーダが生きた時代にもケント王国の法規として生きていると証言している。これ以外にも、ケント王国で二つ（Hlothhere / Eadric 673-685）、ウェセックス王国でイネ（688-694）法典の、合計三つの法典が７世紀にアングロ・サクソン語で編纂された。これまでその理由として、彼らの日常言語であったアングロ・サクソン語の法律用語を、ラテン語の法律用語に移し替えることが出来なかったためであったとされてきた。しかしこの説明は、あまり説得的ではない。それというのも７世紀後半の三つの法典が作成された時期は、ローマの教皇庁から派遣された特使のテオドールスやハドリアーヌスがケントに滞在していた時期であり、彼らはイン

グランドの弟子たちにローマ法を教示していた。二人は求められれば、この法典をラテン語で起草できた筈だからである。

「エセルベルト王法典」については、アングロ・サクソン語（古英語）で起草するという方針は、ローマからの宣教団をアングロ・サクソン語の法概念に対応する正確なラテン語を見つけるというより、遥かに困難な事態に巻き込んだのである。それは外でもない、それまでルーン文字以外では文字化されたことのない言語に、新しい文字コードの体系を創出するという作業であった。この試みが持つ意味の大きさは、注目すべきである。それは音を文字に変換する作業であり、正書法と文法についての明確な判定が要求されるようなことがらであった。

こうした試みが、単に一つの法典を創り出すためのものであったとは考えにくい。ケント王国でのアウグスティヌスが指導したローマ宣教団の活動の脈絡から、この点を考える必要がある。ローマからの布教活動を指揮した教皇グレゴリウス一世は、アングロ・サクソンの言語や風習に慣れない宣教団を助けるために、通訳としてフランク人の聖職者を宣教団に随行させた。フランク人とアングロ・サクソン人の間の相互理解の容易さは、両者の言語が非常に近い関係にあったとされるところから、しばしば引き合いに出された事実である。ケント地方とガリアの間の商業上の政治上の結びつきや、エセルベルト王の宮廷でのフランク人の存在は、一部のフランク人のアングロ・サクソン語への習熟を齎した。逆に一部のイングランド人をフランク語に習熟させもした。これはむろん相互的な事態である。フランク人の活躍があったにしても、ローマの宣教団は、説教やイングランドの若者を教育したり、王家の人々とのコミュニケーションを取ったりするのに不可欠な日常言語に、即座に慣れないことには宣教活動の成功は望めなかった。おそらく彼らは自分たち自身が英語を学ぶ過程で、彼らが最初にこの言葉を文字化したのであった。それはおそらく語彙集の形を取ったと思われる。７世紀から伝来している唯一のアングロ・サクソン語の記録は、先に挙げた４点の法典であるが、新しく創り出された文字言語は他の分野、特に聖職者たちの教育に関係する文献に用いられたのは確実である。

スーザン・ケリーによって仮説の形で描き出された、こうした文字言語としての古英語誕生のプロセスは、多分ドイツでの日常言語であるドイツ語の文字化にも当てはまる事態と思う。既に詳しく述べたように、８世紀のアングロ・サクソン人のライン川以東の布教には、ルーン文字文化から離脱したものの、

それに代わる文字コードをまだ創出していなかった古高ドイツ語に、その表記体系を創案してやることがどうしても必要であった。こうしておそらくアングロ・サクソン宣教師たちの指導のもとに、古高ドイツ語の文字化が実現した。現存する最古のテクストが語彙集や祈祷文や信仰箇条（credo）などであるのはそうした事情を反映しているのである。

3.3. 北海の覇権闘争–フリーセン人とカロリング門閥–

754 年にボニファティウスがフリーセン人の海賊の襲撃で非業の最期を遂げた時期の北海沿岸地方は、ピピニーデン＝カロリンガー権力と、フリースラントの支配勢力とが、激しく角突き合わせる断続的な戦争状態にあった。そもそもピピニーデン＝カロリンガー一門がいかなる手段でその権力を構築して行ったかは明らかにされていない。これは別にこの一門に特有の事情ではなく、多くの貴族門閥に共通している。ポスト・ローマ時代の農業の生産性が著しく低く、荘園経営が齎す果実が到底大きな収益になり得なかった時、いったい何を起点として権力支配を行うのに十分な資力を蓄えることが出来たのであろうか。それは一つの謎と云ってよい。

この問題を解き明かす手がかりは、ピピニーデン・カロリンガーが執拗に相争ったフリーセン人の存在である。両者の戦いは７世紀末から、９世紀のシャルルマーニュの時代まで、戦いと平和の二つのリズムを刻みながら、断続的に１世紀以上にわたって続いた。そこで、古高ドイツ語の文字化の背景となった時代相を理解し、この地域での日常語の文字化現象成立のコンテクストを知るために、フリースラント社会の様相を検証しておきたい。

3.3.1. ピピニーデンの故郷

カロリング家（これはカール・マルテルの子孫の意味）はもともと、ピピン一族がメッス司教アルヌルフ一門と婚姻関係を結んでできた、アルヌルフィンガー＝ピピニーデンと二つの門閥名を合わせて呼ぶのが慣用となっている門閥から出ている。６世紀末のフランク王国は、ネウストリア王クロタール二世と、アウストラシア王国に君臨した王妃ブルンヒルデとの２０年を越える戦いのうちに推移するが、最終的に 613 年にクロタール２世が勝利し、フランク王国全体を単独で支配することになった。この時、敗北した側のアウストラシア王国

でクロタールの支配を受け入れるのを承諾した貴族門閥勢力の指導者として、アウストラシア宮宰ピピンとメッス司教のアルヌルフがいた。このピピンはピピン一世であり、息子ピピン二世と区別するために、ランデン Landen のピピンと、その出身地の名前を付して呼ばれる。これに対して息子のピピン二世はヘルシュタル Herstal のピピンと呼ばれるのが通例である。

やがてピピン一世の娘ベッガBeggaとアルヌルフの息子アンセギゼルAnsegiselとが縁組し、ここにアルヌルフィンガー＝ピピニーデン門閥が生まれたのである。ピピニーデンの一門の栄光を書き記した、一門の言わば公式記録とも呼ぶべき『メッス原初年代記』Annales Mettenses priorесは、ピピン一世が支配した対象として“ qui populum inter carbonariam silvam et Masam fluvium et usque ad Fresionum fines vastis limitibus habitantem iustis legibus gubernabat”[73]. であったと主張している。すなわち作者は、カルボナリアの森とミューズ川とフリーセン人との境界」に挟まれた地方に住む人々としている。ピピン一世は、このような境界で区切られた領域に住む人々を、年代記の文言を借りるならば、iustis legibus gubernabatしたのであった。「正当なる法」とか、gubernareという言葉（動詞）の使用から、この一文はピピンがクロタール二世によってアウストラシアの宮宰に抜擢される以前に、アウストラシア分王国の高級官職担当者として統治した地域であったと推定される。

年代記は、この他にピピン一族の固有の勢力圏、言換えれば発祥の地がどこであるかを、特に明らかにすることをしていない。だがこれまでの研究は、ピピン一世とピピン二世にそれぞれ識別用の地名であるLandenとか、Herstalを付すという 13 世紀以後の表記慣行を認めてきた。この一族の寄進行為の対象となった所領の分布状態、他の年代記、聖人伝での関連する記述から、このような認識を妥当なものと見て来たのである。こうした通説的見解によれば、ピピニーデンの拠点は、ミューズ川沿いのリエージュ＝マーストリヒト地方であるという。この点について通説に沿った線でもっとも立ち入った検討を加えたのは、マティアス・ヴェルナーである[74]。これに対して 1987 年に『フランク史書Liber Historiae Francorum』[75]の研究を公刊したリチャード・A・ガーバーディング

---

[73] Annales Mettensis priores, p.2.

[74] M. Werner, *Die Lütticher Raum in frühkarolingischer Zeit. Untersuchungen zur Geschichte einer karolingischen Stammlandschaft*, Göttingen, 1980.

[75] 国王テウデリクス４世（721-737）の時代に記述された年代記。トゥール司教グレゴリウスの『歴史十書』の最初の６書を含み、これに他の記録や口頭伝承を交えたもの。584 年から 727 年

は、ピピン一世の娘ゲルトルディスGertrudisが母イタベルガItabergaと共同で修道院を建設したブラバントのニヴェルNivelles地方がピピニーデン発祥の地であるという新説を提起した。その根拠としてガーバーディングが重視するのは『メッス原初年代記』に、「自らの世襲地に、母イタベルガとともに修道院を建設しGerutrudis vocabulo… constructoque monasterio in loco qui vocatur Nibegella in heriditae proporia una cum genitrice sua Itaberga」[76]という一文である。ガーバーディングの理解によればピピニーデンは、ピピン２世がプレクトルードと結婚するまで、その勢力圏はせいぜいナミュールまでであって、まだマーストリヒトまでは及んでいなかった。正妻のプレクトルードは宮廷伯のフゴベルトゥスHugobertusとエーレンのイルミナとの間に生まれた娘であった。エーレンのイルミナはウィリブロードにエヒテルナッハ修道院を寄進した婦人であった。彼女はトリーア一帯に豊かな財産を所有する女性であり、エヒテルナッハ創建以前に、トリーア市内のローマ期の倉庫horrea跡に 650 年過ぎに修道院サン・ティルミナを建てた[77]。

ガーバーディングの考えでは、カール・マルテルを産むことになる内縁の妻アルパイダとの関係は、まさしくこの女性がマーストリヒトの勢力を誇った豪族の娘であったところから、ここを政治的な進出目標と設定したピピン二世の努力の所産なのであって、既にある前提ではなかったという。アルデンヌやモーゼル川中流域を拠点とする門閥に属するプレクトルードを妻にした後、ピピンが「高貴で優美な娘」アルパイダと内縁関係を結んだのは、マーストリヒトに根を張る彼女の一門との同盟関係を求めてのことであった。

3.3.2.　マーストリヒトの境位

さて、それではマーストリヒトとはどのような空間であったか。司教座都市マーストリヒトの初期の歴史を特徴づけているのは、この地における司教権力の著しい不安定性である。フランドルならびにフリースラントの伝道者として名高い聖アマンドゥスを初めとして、７世紀中頃以降も一連の司教は住民により都市を追われたり、場合によっては殺害の悲運に見舞われたりしている。アキ

の事績を記している。

[76] Annales Mettensis priores, p.4.

[77] Lukas Clemens, *Tempore Romanorum constructa. Zur Nutzung und Wahrnehmung antiker Überreste nördlich der Alpen während des Mittelalters*, ≪Monographien zur Geschichte des Mittelalters≫, Stuttgart, 2003, p.65 plan.

テーヌ出身の遍歴司教サン・タマンはピピニーデンと親密な関係にあり、先に紹介したニヴェル修道院の建設にも関与した人物だが、彼はマーストリヒト司教就任後３年で司教座を追われている[78]。ルイ・デュシェーヌLouis Duchesneが編纂した”Fastes épiscopaux de l’ancienne France”では、アマンドゥスの次に司教の昇ったとされるのはレマクルスRemacrusであるが、彼はスタブロ＝マルメディStablo-Malmedy修道院創建者である。デュシェーヌがこの人物をマーストリヒト司教であったとする根拠は、一連の文書で彼に付された肩書きがepiscopus abbaと記されていることである。この修道院長司教という形容は、アイルランド修道制に独特の制度であった。episcopusという言葉が入っているからといって、ただちに通例の司教とするわけにはいかない。従って、確実にマーストリヒト司教とみなすことは困難である。

それに続くテオダルドゥス Theodardus は、マーストリヒト教会の所領が不当に横領されている実情を訴えるために国王宮廷に赴いた旅の途中で、アルザスの森の中で、追跡して来た侵害者たちに殺害された。

テオダルドゥスの後を承けて司教に就任したのは、マーストリヒトの有力門閥出身者のラントベルトゥス Lantbertus である。彼は 675 年のアウストラシア王キルデリクス二世の暗殺を契機とする政変によって司教の座を追われ、スタブロ＝マルメディの院長になった。

その後継者はファラムンドゥス Faramundus という名前の男である。彼も７年後には、理由は詳らかではないが司教の職を追われ、マーストリヒト地方から追放された。この後で聖職者、民衆がこぞってラントベルトゥスを再び司教として迎えることを望み、またそれはピピン二世の意向でもあったために、彼は司教座に復帰したのであった。

ごく限られた史料しか残されておらず、また聖人伝という特殊にバイアスがかかった記録が多くを占めるために、司教の追放や殺害といった異例の事態を充分に説明できる情報が欠けている。しかし総じて、国王キルデリクス二世の暗殺と、これに続くネウストリア宮宰エブロインによる権力掌握の余波を受けたラントベルトゥスの追放を除けば、フランク王国の政局に由来する司教の追放、ましてや殺害などは皆無であり、したがってマーストリヒトの司教座をめぐる変転は、この地方内部、わけても司教権力と在地支配層の軋轢に原因があったと見るべきであろう。司教統制の貫徹を許さないような地域社会の特質に

---

[78] Vita Amandi, c. 18.

よってのみ説明される事態のように思われる。たとえば司教座に復帰した先のラントベルトゥスは、この地域の有力者ドド一族と紛争状態となって、結局ラントベルトゥスは殺害されてしまうのであるが、こうした経過のなかに、この地域における教会による支配の基盤の弱体ぶりが、端的に見て取れるのである。

この対立の発端は、ドドの遠縁にあたる者たちで、無頼の徒（pessimi hominess）と伝記中で形容されている兄弟のガッルス Gallus とリヴァルドゥス Rivaldus を、その非道な狼藉に堪り兼ねたマーストリヒト教会の下人（servientes ecclesiae）が怒りにまかせて殺害したことにあった。『ラントベルトゥス伝』の作者の物語るところでは、当時ピピン二世の家政役人 domesticus を務めていたドドは、この行為に復讐するために、手勢を集めて、司教ラントベルトゥスが滞在していた villa Leodio (Liège)に夜襲を仕掛けて、彼を討取るのである。ドドが率いた戦士たちは、その数の多さもさることながら、武装が本格的な点でも通常の軍事行動と何ら遜色がない。彼らは鎖帷子を纏い、楯を構え、槍と剣とを帯びていて、あまつさえ略奪品を収める革製の獲物袋まで用意していた。こうした装備の有様と、戦士の数の多さもあって、伝記作者はこの集団を軍隊（exercitus）と形容している。

このようにして起こったラントベルトゥスの殉教は、この地方の人々にとっても特別の衝撃的事件であった。それゆえその後この事件をめぐって様々な伝承が生まれ、それらは種々の記録に取り入れられた。最古のラントベルトゥス伝とされる『Vita Lantberti episcopi Trajectensis vetussima』は、通例の聖人伝とは異なり、主人公の殉教へ至るまでの叙述が一直線には進まず、ラントベルトゥスを守るために果敢に応戦し倒れた人物のエピソードを、その間に二つほど挟んで進行するという形を取るのである。

それはともかく、聖ラントベルトゥスの殺害者ドドこそは、先に述べたピピン２世と内縁関係を結んだアルパイダの兄弟であった。その事実を『マーストリヒト司教ラントベルトゥス最古伝』は「アルパイダは主君ピピンのドメスティクスであったドドの兄妹であったHaec(=Arpaida)soror erat Dodonis, qui domesticus Pippinis principis …」 (pp.397-8)と述べている。つまりドドはカール・マルテルの叔父にあたる人物であった。ガーバーディングによれば、ピピン二世のアルパイダとの結びつきの意図が、まさしくマーストリヒトに盤踞する有力家門の支援を得て、ミューズ川交易の拠点であるこの地をコントロールすることにあったと言うが、『ラントベルトゥス伝』に描かれたドドとその一

党の行動様式は、彼がピピンにとっていかに貴重な軍事的支援勢力であったかが、余さず示しているところである。実際、ピピンがアルパイダとの間にもうけた庶子カールが、ピピンの正妻であったプレクトルードと後年対決し、その勢力と争った折りに、彼が恃みにしたのはこうした人々であった。P. J. ラポルトは、後のカール・マルテルの勢力の中核部分をなしたこの人々を、カルボナリアの森に巣食うアウトロー集団であったと主張している[79]。正直こうした見方は余りにロマンティックに過ぎるというのが偽らざる感想であるが、ラポルトがマーストリヒト及びその周辺のピピニーデンの支持者集団のうちに非農業民とまでは言わないにしても、専ら農業のみに生活の糧を求める人々とは異質の集団を見て取ったのは誤ってはいないように思える。彼らの生活を特徴づけているのは商業や、ミューズ川、ライン川、その他これらの河川に流れ込む中小の河川が織りなす交易路と北海、英仏海峡の海洋を活動の舞台としていた水運・海運活動である。この時期ライン川河口一帯の商業や流通の分野で、最も大きな、そして活発な動きを見せていたのがフリーセン人であった[80]。ピピン一世は、すでに指摘したように７世紀前半に、フリーセン人の領域に隣接する地方を統括し、フリーセン地方そのものにも一定の影響力を行使していたところから、ピピンの支配の内実には、これら水運の権益が深く関わっていた可能性が考えられるのである。

3.4.　　初期古高ドイツ語写本

話を古高ドイツ語の文字化の問題に戻ろう。この点でトゥールのグレゴリウスが著わした『歴史十書』が重要な手がかりを与えてくれる。この箇所については、これまでの講義のなかで触れたことがあった。しかし、数日前に読む機会があったドイツで開かれた国際研究集会のプロシーディングス[81]の中に収録されているミシェル・バニアールの報告は、「ゲルマン語音声、ラテン語音声と文字化（５世紀～８世紀）」[82]は、私が前に紹介した仮説を裏付けてくれている。それはグレゴリウスがその著書の第５書 44 章で述べているエピソードである。

---

[79] J. P. Laporte, “ Les monastèresw francs et l’avènement des Pippinides”, *Revue Mabillon*, t. 30, (1940), pp.1-30.

[80] Stéphane Lebecq, *Marchands et navigateurs frisons du haut Moyen Âge*, 2 vols, Lille, 1983.

[81] *Akkulturation. Probleme einer germanisch-romanischen Kultursynthese in Spätantike und frühem Mittelalter*, Hrsg. von D. Hägermann / W. Haubrichs / J. Jarnut, Berlin / New York, 2004.

[82] M. Banniard, “Germanophonie, latinophonie et accès à la Schriftlichkeit (Ve-VIIIe siècles) in op. cit. pp.340-358.

この章は「De his quae Chilpericus scripsit」と題されている。「キルペリクスが書いたものについて」とでも訳せようか。

これはグレゴリウスが悪逆非道の王として描き、当代のヘロデかネロと厳しく断罪したネウストリア王が書いた、三位一体論や詩文を冷ややかに素人で、素養を欠いた王の余技でしかないと切って棄てる有名な箇所である。血統の上でローマの元老院貴族に連なり、オーヴェルニュの名門に生を享けたグレゴリウス自身が、野蛮な世界から出て来た蛮族の王のいっぱしの文化人気取りをあざ嗤う、彼の物言いは文化的優越感がいささか露骨に表明されていて、鼻白む思いのするところがある。そのことはさておき、彼は次のように述べている。「この王はセドリウスを手本にして、他の幾つかの書物を韻文で著作した。しかし王の詩文は、全然韻律の規則に従っていなかった。ところで王はまた、われわれの文字に幾つか文字を付け加えた。すなわち、ギリシア人が用いるようなωや、その文字が以下に示されるような ae, the, uui 字形である。また王は王国内の全て都市に手紙を送り、子供にそれらを教えるように、また昔書かれた書物は軽石で消してから書きあらためるように命じた」。字形は写本によって微妙に異なっているが、４文字である点は共通している。

前に引用したことがあるルーン文字研究家のティネケ・ルーイエンハは、これは全てルーン文字と断言していた。つまりゲルマン語の音素を表記する為に考案された、と見ていたのである。これと関連してバニアールは次の３点が、この第 44 章から確認されるところであるという。

１）キルペリクスの改革は、決してグレゴリウスがあっさりと片付けてしまっているようなエピソード的なものではなく、紛れもない知的・言語的な努力である。

２）「俗ラテン語」の進化か生じた音素の変化に対応して、それら変化した音素を表記するために導入された新しい文字であるという考えは、あらゆる徴候からして排除される。

３）フランク語がラテン語文書に登場したとき、(例えば人名や新しい借用語)、そのフランク語の音素をより忠実に再現出来るよう転記するためであったという点は、明白に研究者の意見が確立している。

そして続けて次のように述べる。「結局のところキルペリクスはゲルマン語を文字化するにあたっての開拓者であった。彼は文法の体系化にあたって、ゲルマン語の方言の多様性につきあったのである。実はキルペリクスは、フランク

人の王の全てと同じく、ラテン語とゲルマン語の両方の話者であったが、彼はラテン語の話者として、ゲルマン語の詩文の形態を創るのに貢献した。またゲルマン語の話者として、最初のゲルマン語の記録を実現するのにラテン語の知識を恃みとした。キルペリクスは最初のゲルマン語の記録という点では、カール大帝の先達であった。カール大帝は自分の母国語であるゲルマン（ドイツ）語の文法書を書かせようと考えた。彼は武勲や祖先の戦いを謳う数世紀も昔のゲルマン語の武勲詩を集めて、文字に書き記そうとしたと言われている」[83]。

3.5. 初期の文字記録の例

古高ドイツ語の現存する最古のテクストが語彙集や祈祷文や信仰箇条（credo）などであったことは、既に指摘した。６世紀末のキルペリクスの時代に萌芽状態にあったゲルマン語の文字化という動きは、それにもかかわらず一気には進展しなかった。最大の障壁は、方言への分化状態が著しく、それゆえ言語として絶えず変動の波に洗われて、語彙の上でも、形態、統語的にも安定しなかったために、文字化が技術的に困難であっただけでなく、その実際的効用もそれほど切実に感じ取れなかったためもあろう。それが大きく動いたのは、本格的なキリスト教化の進行であった。

古高ドイツ語の語彙集で、現在までその写本が伝来している一番古いとされ、また最も有名なのは Kero あるいは Abrogans の glossaries 語彙集と称されるものである。Abrogans という名前は、通例この種の語彙集に関して命名の習慣になっているように、最初に記されている単語が「Abrogans」であることに由来する。古高ドイツ語の Abrogans には三つの写本と七点の断片が現存している。三つの写本はそれぞれ Pa, Ra, K と名づけられている。

Pa 写本は現在パリの国立図書館に収蔵されていて、作成年代は８世紀末から９世紀初頭とされている。ラテン語もドイツ語も奇麗なカロリング小文字で書かれている。この写本のドイツ語の語彙はバイエルン方言であるという認識で研究者の意見は一致している。ラテン語、ドイツ語ともにカロリング小文字で書かれていると述べたが、ドイツ語の幾つかの字体は、これより遥かに古く多分 765 年まで遡るのではないかと推測されている。

Ra 写本はかつてライヘナウ Reichenau 修道院に収蔵されていたが、現在は

---

[83] Baniard, op. cit. pp.353-5.

他の全てのライヘナウ写本と同じく、カールスルーエのランデス・ビブリオテークに保管されている。方言はアレマン語であり、バイエルン語はわずかである。作成年代には、研究者によってかなり開きがあり、早い年代を想定する学者は9世紀初頭の 802 年というかなり特定されたものを考えるが、遅い時期に設定しているのは 10 世紀である。早い時代を想定しているゲオルグ・ベゼッケ G・Baesecke はこの写本がレイヘナウ修道院のカタログに記載されていて、また書体が同時代の年代が判明している書体と酷似している事実を根拠にしている。こうした点から、この写本の作成は9世紀初頭と判定するのが妥当であろう。

最後の K 写本は8世紀後半に作成され、過去も現在もザンクト・ガレン修道院に収蔵されている。写本は三つの異なるテクストを収めた集合写本であり、その最初のものが Abrogans である。他にラテン語の神学関連のテクストとザンクト・ガレンの「賛美歌」と「信仰箇条」が含まれている。字体は相互にバラツキが多く、ベゼッケの判定によれば全体で 60 のブロックに分けられ、20 の異なる手が確認されるという。もっとも手は異なるものの字体にはある種の統一性があり、おそらくザンクト・ガレンの書写室の伝統を示す証拠と考えられている。

この K は最古の写本であるが、オリジナルからは最も離れた写本と見なされる。それというのも方言の一部はアレマン語であり、別の部分はフランケンの影響をとどめるアレマン語であるからだ。

これら3つの写本はそれゆえ、バイエルンのテクストが、迅速に西のアレマニエンや北西のフランケンに動いた状況を示す証拠と見られるのである。

3.6. フライジングとイタリア

先の3つの写本のもとになった原本の正字法はアルベオ Arbeo が司教を務めていた時代（764-84）のフライジングで書かれた証書や文書のゲルマン名と酷似しているとされる。例えば Pa 写本に見られる r と s の取り違えは、もとの字体が島嶼地方のものではないかと推測させる点である。また c を u と、cl と di と取り違えていたりするのはフライジング司教コルビニアン（730 年死没）の作成した写本にも見られる。この事実がまたこれらの写本とアルベオと結びつけさせる要因である。それというのも、アルベオはコルビニアンや聖エメラムの伝記を独特の字体のラテン語で書いていて、それが Abrogans 一部の字体と

類似しているからである。この種の独特の形態はドイツの土地からは生まれなかった。語末の s や t の脱落、t の前での c の脱落はある種のイタリア風の習慣である。また congessit と書く代わりに conuescit と綴る仕方はイタリア北部に特有である。ゲルマン語の w から出た gw の代わりに v と綴るのは、ロンバルディアやヴェネツィアの綴り方とされる。ゲルマン語そのものが、場合によってイタリアの影響を示しており、例えばラテン語の軍隊を意味する militum という言葉が herimanno と訳される。これは古代ローマの辺境地帯への植民した屯田兵を意味したランゴバルド語 hariman を示唆している。この言葉はドイツ地方には存在しない。

特殊にランゴバルド的ラテン語、イタリア風のゲルマン語、またランゴバルド語の存在等々が、翻訳者がイタリア流の訓練を受けたという印象を与えるのである。アルベオは当時ランゴバルド人の支配下にあったバイエルンの定住地メラン Meran の近くで 724 年に誕生した。彼は様々な才能に恵まれていて、764 年から、その死の年 784 年までフライジングの司教であった。彼を直接 Abrogans の作成と結びつける証拠はないが、全ての状況証拠は彼が 3 写本の元となったオリジナルの作成者であることを示している。おそらく彼が語彙集作成そのものの発端であり、同時に南ドイツにおけるイタリア・ランゴバルド文化の影響を体現している。

このように見てくると Abrogans はドイツ語で書かれた最初の書物であり、その時期は 8 世紀後半のピピン三世の治世であったと結論づけることができる。ゴート王ディートリッヒの戦争を謳った、ドイツ語で書かれた最古の叙事詩 Hildebrandslied『ヒルデブラントの歌』と同じく、その究極の起源はイタリアであった[84]。

4. おわりに

今日をふくめて１４回にわたって、「ポスト・ローマ期ヨーロッパの表象構造」として、もっぱら言語現象を軸に話しをしてきた。いつもの通り、先行きが分からないままの自転車操業的道行きであったので、全体的なパースペクティヴは依然として、見えてこない。というのは、言語だけでなく、表象全般、つまり美術作品（彫刻, 障壁画, 舗床モザイク）や写本や建築物、儀礼なども検討す

[84] この古高ドイツ語写本については、J.Knight Bostock, *A Handbook on Old High German Litterature*, Oxford, 1955 に依った。

る計画であった。配布した目次のリストのタイトルに（1）と、あえて記したのはいずれ、これらの遺り残した考察を取りあげるつもりであると云いたかったからである。

さて、この限られた回数であったが、それでも一連の考察を通して幾つかの論点が浮かび上がって来たように思われる。

まず、第一に挙げられるのは、ポスト・ローマ期ヨーロッパが経験した言語生活の浮沈の激しさである。５世紀にゲルマン語使用の諸部族がローマ帝国領内に大挙して侵入することにより、いわゆる「民族大移動」の世紀が開始したわけだが、これらゲルマン諸部族は、そもそも部族としての纏まりの核を構成していたのは言語であったから、言語集団でもあった。それゆえ民族の消長は、そうした言語の消長でもあったのである。かくして、これに続く一、二世紀の間の多くの部族の消滅は、同時に彼らの言語の消滅を意味した。幸いゴート語はウルフィラのゴート語訳聖書の編纂により、後代に残ることとなったが、ヴァンダル語やスエーヴィ語、アラン語などは歴史の暗闇に消え失せてしまい、もはや永遠に忘れられてしまった。戦争による敗北がそうした運命を決めたのである。それ以前にも、ほかならぬローマ帝国の膨張により、この巨大で強大な政治勢力に呑み込まれた多くの非征服民族が、おなじ運命を辿っていた。ガリア人しかり、イベリア原住民しかりである。例外的なのは P ケルト語に属するブリトン語である。これはとりわけ大陸のブルターニュ半島で生きながらえ、現在でも生きた言語として使用され続けている。

第二に、話し言葉としてのラテン語の消滅の問題である。ラテン語の西ヨーロッパの覇権文明となったローマ帝国は、今述べたように各地域の土着の社会を併呑し、自らの言語であったラテン語を lingua franca に育て、帝国が政治的に崩壊した後も、文明と教会の言語としての覇権を維持し続けた。この言語自体は決して単純な構造ではなく、高位変種と低位変種の併存、話し言葉と書き言葉とのズレなど複雑な要因を孕みながらも、基幹言語としてあり続けた。だが既にキリスト教の社会への浸透に寄り添う形で、四世紀から展開した教会人の話法セールモ・フミリス（謙遜話法）がもたらした打撃、６世紀ころから顕著となりつつあった統語的、発音上の変化は、８世紀のアルクインの古典主義の提唱が止めを刺す形で、ラテン語のロマンス語への移行を促した。この問題は言語変化にとって、宗教的要素がもつ重要性のすぐれた一例と云えるかもしれない。

第三に、ドイツ語表記体系出現の問題である。ドイツ語はなぜ自らの文字体系を見いだすのにこれほど時間がかかったのか。今日まで纏まった形で残っているドイツで表記した最古の写本が、８世紀であるという事実は何を意味するのか。ほぼ確実なことは、最初のドイツ語写本がドイツ語の語彙集であったこと、そしてそれが、ドイツ人居住地域のキリスト教布教運動と結びついていたことである。その担い手になったのが、同じゲルマン語使用民族であり、そして重要なのは既に独自の表記体系を編み出していたアングロ・サクソン人たちであったという事実である。だが、これ以上の詳しいことは分からない。

ゲルマン人固有の表記システムとして西暦２世紀頃に考案されたとされるルーン文字研究の最近の成果に学びながら、私は一つの仮説を立ててみた。すなわち、フランク人は国家の経営に用いる言語としてはラテン語を使ったが、日常的なメッセージの交換は、ルーン文字を使ったので、あらためてドイツ語表記用のラテン・アルファベットを基礎にした後のドイツ語表記法をつくり出す切実な欲求を持たなかった、と。さらにもう一つの要因として、ドイツ語使用の諸民族が多くの集団に分かれ、集団ごとに微妙にことなる方言を用い、それが五世紀から７世紀が経過する中で、著しいダイナミズムに晒され、変化が激しかったために、統一的表音体系として構築するのが困難であったという事情も考慮する必要があると考えた。

ルーン文字に関しては、最初のドイツ語写本が登場する直近の時代の７世紀に、この表記システムが最も高い頻度で使用されたと想定されているのが、フリースラントや北海沿岸であったが、最古のドイツ語写本は、そこからは遠く離れたイタリア文化の影響下にあったバイエルン地方なのである。ルーン文字に代わって、現在のドイツ語表記のもとになった古高ドイツ語表記が使われ出したとするなら、因果関係の論理からして、北海沿岸から最古のドイツ語写本が出現するのが自然であろう。ドイツ語表記の出現の謎は深まるばかりである。

第四は、これはそれ自体講義の中で論じることをしなかった問題であるが、ドイツ語表記とは対照的に、なぜアングロ・サクソン語は６世紀末という、かくも早い時代に独自の表記法を確立したのかという疑問である。ケント王エセルベルフトはその部族法典を全てアングロ・サクソン語で編纂させたのであった。その突然の固有表記の出現は、アングロ・サクソン社会における固有の表記体系を用いての文書作成の伝統がすでに出来上がっていたことを窺わせる。エセルベルフト王の伝来している最古の国王証書は、604 年の日付をもつロチ

ェスター教会への寄進状であるが、これはラテン語と古英語の二言語を用いて書かれている。アングロ・サクソン社会のヴェナキュラーな表記システムを用いての文書作成技術の更なる研究が進めば、この社会の文字使用の水準と統治技術のさらなる評価が進むであろう。